325
318

始

21170
325-318

帝國圖書館藏

基督再臨問題講演集

內村鑑三著

岩波書店刊行

大正
7. 11. 16
內交

基督再臨問題講演集

目次

聖書研究者の立場より見たる基督の再臨……一
馬太傳に現はれたる基督の再臨……一三
七福の解……二七
世界の平和は如何にして來る乎……三四
信仰の三階段……四六
基督再臨の欲求……五八
世界の最大問題……六七
基督の復活と再臨……七六
約翰傳に於ける基督の再臨……九九

天然的現象として見たる基督の再臨……一〇七
基督再臨の證明者としてのユダヤ人……一二一
聖書の預言とパレスチナの恢復……一三三
再臨信者の祈禱として見たる主の祈禱……一四六
レイエスの變貌……一五七
ラザロの復活……一六八
ツルーベッコイ公の十字架觀……一七七
馬太傳第十三章の研究……一八七

附　錄

平和の告知……一九九
身體の救拯……二〇九
萬物の復興……二一九

聖書の證明……二二六
基督再臨を信ぜし十大偉人……二三三
余が基督の再臨に就て信ぜざる事共……二四三

基督再臨問題講演集目次　終

基督再臨問題講演集

内村鑑三述

聖書研究者の立場より見たる基督の再臨

（一九一八年一月六日東京神田基督教青年會館に於て）

余が基督信者となりて以來年を閲する事茲に四十、此間余の從事したる仕事は種々なりしと雖も終始一貫して余を離れざりしものが唯一つある、聖書の研究是れである、聖書を完全に了解せむ事、殊に人をして註解書に據るの要なく自ら聖書を手に取りて之を完全に了解せしめむ事、是れが余の冀望であつた。

然し乍ら宗教は素と余の副業であつた、余の本業は何ぞ、天然學であつた、余の知識の基礎は自然科學を以て築かれたのである、故に聖書以外に余の精讀したる書は極めて多くあつた、就中有名なるダーキンの『種の起源』は余の再讀三讀し

たるものであつた、萬物は徐々として無限に進化すとの觀念は余の腦底に深く刻み込まれた、ダーキンの師ライエルも亦同じ事を敎へて吳れた、天地は六日の間に神の手より創造せられたるに非ず、今日吾人の周圍に起りつゝあると同じ進化の作用を繼續する事幾億萬年にして漸く宇宙は形成せられたのであると、是の如きが余の天然觀の根柢であつた。

後米國に渡りてより余は萬國史の研究に耽つた、想起す一八八五年の秋余の隻手にギボンの羅馬史五卷を抱き着のみ着の儘アマスト大學總長シーリー先生の許に馳せ付けたる事を、余は幸にも先生の親切に由て大學の講義に列する事が出來た、其第一回はモース博士の歷史の講演であつた、而して博士曰く「歷史は人類進步の記錄なり」と、此言を聞いて余は思うた、是ある哉、人類の發達も亦天然の發達と異ならずと、卽ち余の歷史觀と天然觀とが玆に全く一致したのである。

斯の如くにして進化論を基礎とする余の知識は一層堅きものとなつた、其間にありて余は又一方に於て孜々として聖書を研究した、アマスト大學は當時最も優秀なる宗敎學校にして余の之を選びたる理由も全く其處にあつたのである、然るに學生等は信仰に熱心ならず、余に取ては何よりの糧なりし每朝の祈禱會に於て彼等は奇怪にも私かに學科の豫習を爲し甚だしきに至ては金錢貸借の勘定を爲す者さへあつた、然し乍ら余は獨り聖書の研究に沒頭した、一日に二時間を聖書の爲に費す余の生活は同窓諸生の珍とする所であつた、而して恩師シーリー先生は余の最良の指導者であつた、先生は或時余に敎へて曰うた、

徒らに自己の內心のみを見る事を廢めよ、貴君の義は貴君の中にあるに非ず、十字架上のキリストに在るのである

と、此一言は余の信仰に大革新を起さしめた、而して熱烈なる愛國者としてアマストに入りたる余は單純なる福音的信者として其地を出でた、シーリー先生の此一言なかりせば多分今日の余はなかつたであらう。

爾來余は聖書の研究を以て余の天職と做し歸國後今日に至る迄余の全力を傾注して此事に當りつゝあるのである、余が最後の一圓を拋つ迄廢する能はざる最も完全なる仕事は之を措いて他に無いのである、之が爲には余は多くの註解書をも讀んだ、余は又自己の天然學歴史學の蓄積を盡くして聖書解釋の爲めに用ゐた、然し乍ら此の熱心なる努力を以てして尙ほ解すべからざる何者かゝ聖書中にある事を余は發見したのである、多くの註解者の說明する能はず余の素養亦之を解明する能はざる何者かゝ聖書の中にありて余を苦むる事多年であつた、或時は余は思うた、余は終に聖書を解せずして死するに非ずやと。

更に又余に迫り來りし一の大問題があつた、方今の世界問題卽ち是れである、誰かいふ世界の問題の如きは我の深く關する所に非ずと、イエスキリストを信ずる者に取ては世界の苦痛はイエスの苦痛であつて又我が苦痛である、幾億の同胞が戰爭の渦中に苦みつゝある世界の現狀は眞正の基督信者の心を晝となく夜となく惱ましむる大問題である、知らず平和は如何にして來るのである乎。

之を進化論的天然學又は歴史學の立場よりすれば平和は必然到來すべきである、人類の進步に由て戰爭は早晩絕滅すべきである、而して旣に其徵候少からずと稱せらる、嘗て露國の經濟學者プロツホ、世界戰爭不可能論を公にして武器又は經濟等の方面より之を主張した、尋いで露國皇帝の主唱により萬國平和會議は引續き和蘭海牙に於て開かれた、米國のカーネギー氏率先して此擧を援助せんが爲め三百萬弗を出資し壯大美麗なる平和宮を建築した、其各室の裝飾は各國美術の粹を以てし我日本政府も亦高貴なる西陣織物を提供して之に充てたのである、かくて平和宮は將に完成を告げんとする一九一四年七月卅一日、俄然世界未曾有の大戰爭は勃發したのである、之れ抑も何を意味する乎、平和條約の締結により多くの戰爭は之を避け得べしとは平和論者の主張ではなかつた乎、而して旣に三十有餘の戰爭が此方法に由て豫防せられしといふ、嘗て瑞典那威の間戰端を開かん

としたる時兩國の社會主義者等擧て戰爭に加はらずと決議したるが爲め皇帝オスカーの心を動かして終に戰ふに及ばざりしは人の祝したる所である、然らば今回の戰爭も亦何故同樣に之を避くる事が出來なかつた乎、各國の社會主義者等は何故愛國者と變じて了つた乎、斯くて有史以來最も無意味なる最も惡辣なる且最も悲慘なる、殆ど人類社會の根底を毀たんとするが如き此大戰爭の始まりしは何故である乎、敢て問ふ讀者諸君の心中之が爲めに大なる懷疑は曾て起らざりし乎、少くとも余には其れが起つた、一九一四年七月卅一日以後の數日間は余の信仰に關する大なる試諫の時であつた。

嘗て英國の哲學者ハーバート・スペンサー進化論を以て世に立ちし時偶々南阿戰爭起りて英國民みな熱狂した、彼れ其狀を見て歎じて曰く「斯の如きは英國人の野蠻的退化である」と、然り、而して今回の戰爭に亦同樣の命名を爲さんと欲すれば野蠻的退化、邪教的退化等幾多の文字を以てする事が出來る、唯此間に在りて余が一縷の望を繫ぎしものは米國の態度であつた、然るに事實は果して如何、往年の平和國今や平和の爲めに力むる事を爲さずして却て野蠻化の魁を爲しつゝあるのである、余は慨歎の餘り余の主宰する小雜誌『聖書之研究』を以て米國に對する余の痛惜の情を述べて置いた、然るに在米の一友人之を英譯して彼國の多くの新聞に寄稿したる處悉く握り潰されて一も紙上に掲載せられず、中に『紐育基督教ヘラルド』のみは親切にも謝絕狀に添へて其原稿を余の許に轉送し來たのである、而して今や米國の新聞紙に平和論の掲載せられざるは實に當然である、何となれば米國は今正に狂的狀態に於てあるのである、其唯一例を示さん乎、大統領ウィルソン氏先般全合衆國の諸教會に布令して曰く「何月何日を期して一齊に米軍勝利の爲に祈禱を爲すべし」と、其事既に基督信者の拜する神の何たる乎を辨へざる大なる誤謬である、然し乍ら事は此處に止まらなかつた、其所定の當日或る南部に於ける人民教會の一牧師は何故か命ぜられたる祈禱を爲さなかつた、玆

に於て教會員等の憤怒其極に達し彼等は忽ち敎壇上に躍り上りて牧師を捕へ之を自働車に載せて市外の平原中に驀進し一の枯木に彼の四肢を縛して拍手喝采罵詈を浴せて立ち去つたとの事である、噫是れ果してかのワシントン、リンコルンの建設したる自由の米國である乎、諸君は此事を聞いて人類の爲め又自己の爲め之を憤慨せざる乎、之れ實に狂亂の沙汰ではない乎、米國の墮落茲に至りて人類の望みは最早斷絶したりと言はざるを得ないではない乎、開戰當初ハーバード大學前總長エリオット博士書を某新聞に寄せて曰く「今次の戰爭に由て基督敎會の無能は曝露せられたり」と、而して敎會が其努力に由て平和を來さむとは余の到底信ずる能はざる處である、今や平和の出現を期待すべき所は地上何處にも見當らないのである。

斯くの如くにして余の學問の傾向と時勢の成行とは余をして絶望の深淵に陷らしめた、余は茲に行き詰つたのである、一昨年夏獨り暑を日光に避けて余の心中此問題のあるあり、人知れず之が解決に苦んだ、其時偶々米國の友人より『日曜學校時報』二部を送つて來た、此雜誌は往年余の購讀したる所なりしも其の常にキリスト再臨を主唱するにより厭うて之を廢したのである、然るに此時久し振りに遠路風雨に曝されて余の許に屆きたる號を披見すれば其劈頭に曰く「キリストの再臨は果して實際的問題ならざる乎」と、余は新なる感興を以て之に對した、而して試に讀下すれば行一行余の心に訴へ再讀三讀余をして然り然りと點頭首肯せしめた、斯くてこそ世界問題も余が內心の問題も悉く說明し得るのである、愚かなりし哉久しき間此身を献げ自己の小さき力を以て世の改善を計らんとせし事、こは余の事業ではなかつたのである、キリスト來りて此事を完成し給ふのである、平和は彼の再來に由て始めて實現するのである。

而してこのキリストの再來こそ新約聖書の到る所に高唱する最大眞理である、馬太傳より默示錄に至る迄試に此眞理を敎ふる辭句に附印せん乎、每葉其の數行を

見ざるはない、聖書の中心的眞理は卽ち之れである、是を知つて聖書は極めて首尾貫徹せる書となり、其興味は激增し其解釋は最も容易となるのである、是を知つて聖書研究の生命は無限に延びるのである。

現時の學者は多く此事を信じない、然し乍ら最も有力なる學者にして其冷靜なる學者的立場より堂々として此眞理を立證したるものが少くない、今其二三の例を擧ぐればボストン浸禮教會の牧師たりしA・J・ゴルドン著『視よ彼は來る』の如きは既に普く人の知る處である、而も此書は決して通俗的著述ではない、其中に深き知識と博き學問とがある、又經外聖書研究の專門大家たるR・H・チャールス著『新舊約間の思想並に信仰の發達』中に曰ふ「聖書は素と顯現的書物である」と、所謂apocalypticとは隱れたる者の不意に現出するの意味であつて再臨を表はすに最も適當の語である、次に劍橋大學教授F・C・ブルキットは其著『福音の歷史及び其相傳』を以て有名である、彼の聖書研究は明斷銳利を以て知らる、此人にして此言あり、曰く

神御自身が此世に現出し給ふといふ顯秘錄記者等の新時代の理想は、是れ基督教のたゞの裝飾に非ずして、其熱心を喚起せし中心的原動力たりとの事を我等（學者）は徐々と看取しつゝあり

と、キリスト再臨の如きは基督教の裝飾物に過ぎず、貴ぶべきは再臨其事に非ずして其中に含める靈的眞理であるとは近代の神學博士等の好んで主張する所である、而して余は是等錚々たる諸學者の前に斯學の權威ブルキット氏の此言を提供して彼等の再考を促さゞるを得ない。

而して此事たる決して學者の立證に俟つ迄もないのである、聖書自身が其證明者である、諸君試に聖書を繙いて左の諸節を熟讀せよ、キリストの再臨を信ぜずして其の美はしき語は悉く無意味に歸するのである、之に反して再臨の光に由て照されん乎、言々句々皆躍動し聖書中また矛盾を存せざるに至るであらう。

約百記　十九章廿四節より廿七節まで、**詩篇第一篇**。**羅馬書**　八章十八節より廿五節まで。**哥林多前書**　十五章全部

馬太傳　五章三節より十二節まで○同十八節○六章十九節より廿一節まで○七章廿一節より廿七節まで○十二章卅六、卅七節○同四十節より四十二節まで○十三章全體○十六章廿七節○十七章イエス變貌に關する記事○十九章廿八節○廿三章卅七節より卅九節まで○廿四章廿五章全部○二十六章二十九節○同六十四節。

馬可傳　八章卅四節より卅八節まで○十三章全部

路加傳　一章卅三節○六章廿節より廿六節まで○九章廿六、廿七節○十二章八、九節○同卅五節より四十八節まで○十七章二十節より三十七節まで○十九章十一節より廿七節まで○二十一章全部

約翰傳　十一章に於けるラザロ復活の記事參考○十四章一節より三節まで

使徒行傳　一章十一節○三章廿一節○十七章三十一節○二十四章十五節。

馬太傳に現はれたる基督の再臨

（一九一八年二月十日東京神田基督教青年會館に於て）

余はクリスチャンとなりてより四十年後の今日程思想の充溢を覺えたる時はない、此頃自分乍ら何やら若返りしやうに感ずるのである、從來此處彼處部分的に余の心中にありし聖書が今や全部自己の有となつて其何れの頁を繙くも限なき感興を惹き起すのである、されば茲に其一例を語りて以て余が最近の心的狀態と問題の性質とを明かにせんと欲する。

昨日は珍しき好天氣であつた、嚴冬去つて新春既に來るの感があつた、余は一日の休養を欲して久振りに市へ出た、市は余に取つては何の用あるなし、唯だ書店を要するのみ、此日も余は例の如く一書店に入りて何か近頃の問題に關係ある良書はなき乎と漁つて見た、而して偶々米國の學者A・M・ラム氏の小著『微光、一名再

來の徴候」と題する書を手に入れた、著者に何等學位其他の肩書を冠せざるより推して多分良著ならんと想像したのである、次に余は玆を去つて更に他の一書店に立ち寄つた、主人の應接を待つ間の小閑を偸み余は店頭にある古き英國百科辭典の一冊を拔いて基督再來論の一章を繙讀した、筆者は有名なる教會歴史の大家A・ハーナックである、ハーナック自身の信仰は人も知る如く正統的ではない、然し乍ら彼は世界第一流の學者である、而して信頼すべきは彼の如き一流の學者である、彼等は自己の信仰の故を以て眞理を蔽はない、彼等は其深邃なる研究の結果自己の信仰如何に論なく眞理は眞理として之を明白に提唱するのである、ハーナックも亦然りである、彼は短き四頁の中に最高の學者的權威を以て斷じて言ふ「再來は基督教の根本教義たり、再來思想なくして基督教は起らず、一切の教義は之に關聯す、然るに今日迄此信仰の棄てゝ顧みられざりしは教會の俗化したるが故のみ、再來の信仰の衰微する時は卽ち教會の腐敗しなる時にして前者の熱烈なる時は卽ち後者の健全なる時なり」と、而して最後に又繰返して曰ふ「福音と再來との間には密接不離の關係あり」と、斯學の權威ハ氏の此言は蓋し神學者教役者等の必讀すべき文字であらう。

余は更に歩を轉じて上野公園に向つた、時未だ花季ならざれば俗物の喝集を見るなく滿園靜寂にして風光絶佳であつた、多くの過去が余の腦底に浮び出でた、彼處に友と共に祈りし杜あり此處に進化論を闘はしたる丘あり、余は暫し青年時代に立ち歸つた、かくて余の足は自ら動物園の前に出でた、乃ち大なる小兒となりし積りにて入りて諸動物を觀察した、豹は其幼兒を抱きて臥し兎は餌を食んで戯る、熊あり狐あり狸あり、余は深き興味を以て彼等を觀た、而して歸途には鶯谷停車場に一人の教友を訪ね彼が爲しつゝある良き傳道の消息を聞いて喜んだ。

この動物園の逍遥は余をして以賽亞書の大預言を想ひ起さゞるを得ざらしめた、「狼は小羊と共に宿り、豹は小山羊と共に臥し、犢牡獅肥えたる家畜共に居りて

小き童子に導かれ、牡牝と熊とは食物を共にし、熊の子と牛の子と共に臥し、獅は牛の如く藁を食ひ、乳兒は毒蛇の洞に戯れ、乳離れの兒は手を蝮の穴に入れん、かくて我が聖き山の何處にても害ふ事なく傷る事なからん、そは水の海を蔽へる如くエホバを知るの知識地に充つべければなり」と(十一の六―八)、こは果して文字通りに解すべきである乎或は一個の美はしき譬喩に過ぎざる乎、余は試に碩學の此事に關する説明を聞かんと欲して家に歸りて余の書齋に存する多くの註解書を披見した、其第一はオックスフォード大學教授チーネの註解である、彼の研究は今は稍古しと雖も彼は疑ひもなく今猶ほ信賴すべき權威である、彼も亦自ら正統派の信仰を有せざるに拘らず此事に關する多數の學者の所説を列擧し就中獨逸の舊約聖書學者ネーゲルバッハが之を文字通りに解せざるべからずと做せる説を紹介して而して曰く「余の説も亦然り!」と、次はフランツ・デリッチである、彼の名は若きデリッチのそれと共に父子相並んで學界に喧傳せらる、彼には深き信仰あり溫き愛あり而して豐なる常識あり、其研究亦新式ならずと雖も該博なる原語の引證に由て單純なる福音を敎ふ、而して彼も亦曰ふ「之を文字通りに解すべし」と。

チーネ、デリッチ等の如き權威者の解釋にして斯の如しとせば我等は深く考へなければならない、勿論今の動物學者は之を聞いて笑うて曰ふであらう、「愚なる哉、此の如きは動物の構造の許さゞる所である」と、果して然る乎、現代の大哲學者ベルグソンの敎ふる處に由れば生命は無限に變化し進化するといふではない乎、生命の發展何處に至る乎之を豫想する能はず人は人以上の者となり宇宙は漸次靈化すべしとは彼の主張ではない乎、されば進化の終極に於て以賽亞書の預言の文字通りに實現すべき事も亦學者の立場より見て之を斥くる事が出來ないのである、知るべし、基督再來の一笑に附すべき迷信的敎義にあらざることを、碩學の其眞理を認むるあり、我等は敬虔の態度を以て其研究に當るべきである。

若し聖書中に何か一つ其の最も頻繁に語る所の眞理ありとせばそは基督の再來で

ある、新約聖書中直接に又間接に再來に言及する所實に四百十八箇所の多きに及ぶと云ふ、故に新約聖書が何物かを我等に敎ふるならば卽ち此事を敎ふるのである、然るに多くのクリスチヤンは聖書を貴ぶと稱し乍ら之を讀まない、彼等は屢聖書中の一句を捉へ以て重大なる問題の解決に供せむとする、天主敎徒が使徒ペテロに基づく敎會の權威を主張するの根據は一に馬太傳十六章十八節に在るのである、果して然らば聖書中之を繰返す事四百十八回にして或る所にては兩三章引續き之を論するが如き大問題を如何にして看却し去る事が出來る乎、若し之をしも信ぜずといふならば須らく聖書を棄つべきである、聖書を薦むるは再來の眞理を薦むるのである。故に再來の眞理を厭ふ者は聖書を拋つに如かず、而して聖書拔きのクリスチヤンと成るに如かないのである。

馬太傳はキリストの敎を知るに最も確實なる資料である、此書が新約聖書の劈頭に置かれたるは感謝すべき事である、ルナン曰く「古來人類を感化したる書にして馬太傳の如きものあるなし」と、而して此馬太傳中明白に基督再來を說くの語のみを擧ぐるも尙ほ次の如きものがあるのである、

我誠に汝等に告げん、汝等イスラエルの村々を廻り盡さゞる間に人の子は來るべし（十章廿三）。

人もし全世界を得るとも云々……それ人の子は父の榮光を以て其使たちと共に來らん、其時各自の行に由て報ゆべし（十六章廿七節）。

變貌の記事（十七章）是れ再來の前兆と見て初めて能く解釋し得る事實である、クリソストムの如きは斯く解したのである。

我まことに汝等に告げん、我に從へる汝等は世改まり人の子榮光の位に坐する時汝等も十二の位に坐してイスラエルの十二の支派をさばくべし（十九章廿八節）。

若しそれ廿四、廿五の兩章の如きは「汝の來る兆と世の末の兆はいかなるぞや」との問題に對しキリストの答へ給ひしものであつて卽ち全然再來の問題である、

もし此處に再來なしといはゞ何と言ひて之を辯解し得べき乎、

其時人の子の兆天に現はる、又地上にある諸族はなげき哀み且つ人の子の權威と大なる榮光をもて天の雲に乘り來るを見ん（廿四章三十節）。

十人の童女の喩（廿五章一—十三節）。

千銀の喩（同十四—三十節）

人の子己れの榮光をもて諸々の聖使を率ゐて來る時はその榮光の位に坐し云々（廿五章廿一節）。

而して特に注意すべきは廿六章六十一節である、イエス此時祭司の前に引出され種々なる妄の證を立てらるゝとも默然として答へず、最後に祭司の長立ちて「汝キリスト神の子なるか、我汝を活ける神に誓はせて之を告げしめん」と曰ひたるに對し答へて曰ひ給はく

汝が言へる如し、且我れ汝等に告げん、此後人の子の大權の右に坐し天の雲に乘りて來るを汝等見るべし

と、而して言此處に至るや祭司の長其の衣を裂き「此人は褻瀆の事を言へり、何ぞ外に證據を求めんや」と叫びて直に彼を死に定めたのである、知るべしイエスの死を決定したる者は實に此一語に在りし事を、されば此事たるイエスに取ては彼の生命を賭したる最大問題であつたのである、人其の生命を賭するの問題より重大なるものなし、再來はイエスの死を以て守りたる眞理中の大眞理であつた。

人或は曰ふ純粹なる基督教は山上之垂訓に在り彼處に教義あるなく奇跡あるなしと、故に基督教を最も簡單に傳へんと欲する時常に選ばるゝものは山上之垂訓である、而して此山上之垂訓にのみは再來思想を含まずと言ふ、果して然る乎、「天國に於て至微き者と謂はれん……天國に於て大なる者……天國に入る事能はじ」といひ「審判に干らん、集議に干らん、地獄の火に干らん」といひ、「隱れたるに靈給ふ汝の父は明顯に報ゐ給ふべし」といひ、「我を呼びて主よ主よといふ者盡く

天國に入るに非ず云々」といふが如きは是れ再來の思想に非ずして何である乎、然らば山上之垂訓も亦此思想を以て充ち滿つるものと謂はざるを得ない。

而して其最初の所謂「美訓」も亦然りである、「美訓」は純道德であるといふ、然し乍ら注意すべきは聖書に於ける道德の敎訓は大抵再來の思想と關聯して說かれてある事である、「心の貧しき者は福なり」、之れ純道德である、然し之れ丈ではない、何故に福である乎、曰く「天國は其の人のものなればなり」、此の理由より離して彼の道德を解する事が出來ないのである、「哀む者は福なり」、何故？「其人は安慰を得べければなり」、此世に於て非ず、哀む者は此世に於て十分なる安慰を得る事が出來ない、天國に於て初めて全き安慰を得るのである、「柔和なる者は福なり」、何故？「其人は地を嗣ぐ事を得べければなり」、然り我等の踏める此の堅き地である、此地が時至らば獰猛なる者の手より移されて柔和なる者に與へらるゝといふのである、以賽亞書十一章の文字通りに實現する日が卽ち其時である、「饑渴く如く義を慕ふ者は福なり」何故？「其人は飽く事を得べければなり」、亦此世に於てに非ず、彼國に入りてゞある、「矜恤ある者は福なり」、何故？「其人は矜恤を得べければなり」、矜恤とは雅各書二章十三節に所謂「審判かるゝ時亦憐まる云々」の意味であつて聖書中の術語の一である、「心の淸き者は福なり」、何故？「其人は神を見る事を得べければなり」、見神とは漠然たる精神的經驗の謂ではない、其事の何たるかは默示錄最後の二章に徵して明白である、「和平を求むる者は福なり」、何故？「其人は神の子と稱へらるべければなり」、單に良きクリスチャンとなるの謂に非ず、神の子の榮譽を荷はせらるゝのである、其榮光の冠を被せらるゝのである、而して最後に「義しき事の爲に責めらるゝ者は福なり」といひて又「天國は卽ち其人の有なればなり」と繰返して居る、聖書は希伯來人の筆に成りしものなれば亦之を希伯來思想を以て讀まなければならない、而して希伯來の文章に於て聯語は其特徵である、又七なる數は神の數にして完全を示すのである、美訓は

通常之を九福と稱するも良き聖書學者は是れ亦七福にして而かも一思想を聯語を以て反覆したるものなりと說明する、九福の第九は「汝等云々」と其人稱を異にするを以て之を他と離すを可とすべく、又其第八の後半は明白に第一の繰返しである、故に「心の貧しき者」以下「和平を求むる者」に至る迄を以て七福と解するに如くはない、而して此七段は同一思想の敷衍である、卽ち何れも其前半に於てクリスチャンの何たる乎を定義し其後半に於て天國の定義を與ふ、美訓畢竟信者と天國との關係を敎ふるものに外ならないのである。

而して馬太傳に於て「天國」と「神の國」とは判然區別せらる、前者は卅二回後者は四回用ゐらるゝも其意義は全く異なる、「神の國」と言へば唯に天國のみならず心の狀態も亦其中に含まるゝのである、

神の國と其義きとを求めよ（六章卅三）

若し我れ神の靈に由りて鬼を逐出しゝならば神の國はもはや汝等に至れり（十二章廿八節）

富者は天國に入る事難し、又汝等に告げん、富者の神の國に入るよりは駱駝の針の孔を通るは却て易し（十九章廿四節）

是故に我れ汝等に告げん、神の國を汝等より奪ひ其果を結ぶ民に予へらるべし（廿一章四三節）

是れ皆な路加傳に「神の國は顯はれて來るものに非ず……夫れ神の國は汝等の衷に在り」（十七章廿一節）と言へると同樣に解すべきである、然るに「天國」とは是の如き靈的狀態に非ず、希臘語に天國とは長き語にして「幾多の天の國」を意味す、而して其起源は但以理書七章十三節の「人の子の如き者雲に乘りて來り……之に權と榮と國とを賜ひて云々」に在るのである（萬國批評的註解中アレンド氏馬太傳註釋參照）、天國は卽ち人の子雲に乘りて來る時に實現すべき其具體的の國である、「天國は其人の有なれば也」とあるは斯かる國の事を謂ふのである。

故に聖書は始より地的天國の實現を敎ふるのである、是れ解するに難き眞理なりと雖も亦人心の最も深刻なる要求に應ずるの眞理である、見よ美はしき此地は悉く利己心の化體たる富豪等の手に歸して心の貧しき者哀む者柔和なる者は生涯寸地を獲る能はず、若し世が此儘にて終るべくば義者の悲憤此上なしである、然れどもイエスは其弟子等に曰ひ給ふのである「忍び待て、時到らば我再び來らん、人の手に藉らず萬物を己れに服はせ得る能力を有てる我れ……我れ萬物を一變し新天新地を實現して之を義者に與へん」と、實に斯くあれかしである、斯くてこそ我等の心に感謝が充つるのである、饑渴く如く義を慕ふ者、矜恤ある者、心の清き者は此世に於て蹂躙らる、平和を求むる者は決して此世に於て神の子と稱へられない、然し乍ら來るべき天國に於て彼等は必ず神の子たるの冠を戴き其榮光と權利とに與る事が出來るのである。

七福の解

馬太傳五章山上之垂訓發端の言辭は左の如くに配列して見て其意味が一層明瞭になるのである、

心の貧き者は福なり、　**天國は即ち其人の有なればなり。**
哀む者は福なり、　其人は安慰を得べければなり。
柔和なる者は福なり、　其人は地を嗣ぐ事を得べければなり。
饑渴く如く義を慕ふ者は福なり、　其人は飽く事を得べければなり。
矜恤ある者は福なり、　其人は矜恤を得べければなり。
心の清き者は福なり、　其人は神を見る事を得べければなり。
平和を求むる者は福なり、　其人は神の子と稱らるべければなり。

義のために責めらるゝ者は福なり、天國は即ち其人の有なれば也。

以上に「福なり」と云ふ言辭が八次繰返されてある、而して第十一節に續いて「我が爲に人汝等を罵り……其時は汝等福なり」とあるが故に全部を總稱して九福と云ふを常とする、然し乍ら最後の「福なり」は「汝等は」とありて特に弟子等を指して云ふものなるが故に之は前の「者」又は「人」と云ひて一般の人を指して云ふものより區別して讀むのが本當であると思ふ、而して又殘る八福の中に第一と第八とは「天國は即ち其人の有なれば也」と云ひて同一の祝福を宣ぶるが故に第八は第一の高調的重複と見るべき者であると思はれる、依て見る九福は實は七福であることを、七は希伯來人に取り天の數であつて完全の數である、七福は神が人に降し給ふ完全の祝福である、世人に其欲する肉の七福あるが如くに、信者にも亦其求むる靈の七福があるのである。

以上之を上下兩段に列記したるが、上段は信者の描寫であつて、下段は天國の記述である、信者とは如何なる者かと云ふに第一に心の貧しき者（心より自己に賴まずして神に依賴む者）、第二に哀む者（自他の罪を哀む者）、第三に柔和なる者、第四に饑渴く如く義を慕ふ者、第五に矜恤ある者、第六に心の淸き者、第七に平和を求むる者、即ち之を總稱すれば義者、神に義とせられし者、其故に世に惡まれ人に責めらるゝ者であるとの謂である、而して信者の描寫と相對して天國の記述がある、第一に之を天國と總稱す、キリストが天より降りて之を建設し給ふ者なるが故に斯く稱す（但以理書七章十三節參照）、第二に完全なる安慰の供へらるゝ所、第三に地上に建設せらるゝ國、第四に義の充溢する所、第五に矜恤を以て審判の行はるゝ所、第六に神の聖顏を拜することの能る所、第七に信者が神の子と稱せられて其特權に與かる事の能る所である、信者とは上段に示すが如し、天國とは下段に記すが如し、上段の示す資格を有する者は下段の記す恩惠に與るを得べしと云ふのである、所謂希伯來人の聯語的記述法であつて單一の眞理を多方面より觀察して

其内容を明かにしたるものである。

茲に於て天國の何なる乎が明かに示されたのである、天國は單に靈的狀態ではない、地に建設せらるゝ國である、哲學者コムトの理想せしが如き完全なる人の社會である、而かも肉の人に由て組織せらるゝ社會ではない、神の子等を以て其市民とする國である、之を統る者は哲學者の稱する靈的勢力ではない、神の榮の光輝その質の眞像なる主イエスキリストである、天國に於て神の子等は彼に於て神を見奉り、神は又彼に在りて聖國を照らし給ふのである、天國は又公平なる審判の行はるゝ所である、其所に矜恤を以て他を審判きし者は矜恤を以て審判かるゝのである、雅各書第二章十三節に言ふが如しである、天國は又飽滿の所である、而かも食物の飽滿ではない、義の飽滿である、飽くまでに義を以て心を滿たすことの能る所である、依て知るイエスが傳道の首途に於て敎へ給ひし事は使徒ヨハネが最後に述べし所と異らざる事を、天國とは「新らしき天と新らしき地」とである、「目の涙は悉く拭ひ去られ復た死あらず哀み哭き痛みあることなき」所である（安慰）、「渴く者には價なしに生命の水の源にて飲む事を許さる」所である（飽滿）、「凡て潔からざる者と憎むべき行を爲す者、或は謊を言ふ者は必ず此に入ることを得ず、唯羔の生の書に錄されたる者のみ入るなり」とありて眞の審判の行はるゝ所である、而して「我れ彼の神となり彼れ我が子と成るべし」と云ひ、「僕等神の面を見、神の名彼等の額に在るべし」とありて眞の見神が行はれ、罪の子が神の子として認めらるゝ所である（約翰默示錄第廿一、第廿二章を見よ）。

斯くの如くにして山上之垂訓は單に純道德を說いたる者ではない、其發端より天國を說いたる者である、天國に附隨して道德を說いたる者である、之を低い道德と稱する人があれば其れまでゝある、然れども聖書の記事は明白にして誤解を許さないのである、山上之垂訓は其發端より天國を說き、來世を說き、復活を說き、審判を說き、信者がキリストの再來と稱し來りし者を說くのである。

始めに「天國は卽ち其人の有なれば也」と云ひて終りに同一の言辭を繰返して云ふ、是れ最も大切なる事なるが故に特に聽者の注意を惹かんが爲めに重複して云ふたのである、信者は主觀的には自己に省みて心の貧しき者、然れども客觀的には神の備へ給ひし十字架上のキリストを仰瞻て義者である、而して天國は特に彼の有であるとの事である。

附言　以上の如くに所謂九福を七福に解せし者は聖書註解者の王と稱せらるゝドクトルH・A・W・マイエルである、眞に正當なる解釋であると思ふ、他にベーコン、ヴェルハウゼンの二學者も他の理由よりして之を七福に解して居る、勿論此解釋に對して多くの異論が唱へらる、今茲に之を掲げない、斯かる事に於てはマイエルの權威に九鼎の重みがある。

The International Critical Commentary に於てW・C・アレン氏は「天國」なる文字を終末的の意味に取て居る、氏の如き純批評家にして此文字を此意味に解するを見て福音書記者の原意の此に在りしことを確むることが出來る、讀者にして英語を解し得る者は同註解書序論第六十七頁以下に於て其詳細を探るべきである、冷靜なる聖書學者が却て舊信仰の味方をなすは眞に痛快の事である。

智識と信仰　智識は信仰の代用を爲さない、人の救はるゝは信仰に由る、智識に由らない、然れども智識は貴きものである、輕んずべからずである、智識の有るは優かに無きに勝さる、智識を誇るは罪惡である、然れども無智は名譽ではない寧ろ恥辱である、智能は神が人類に賜ひし大なる贈物である、我等は之を磨き善く之を用ゐて神の善き器具たるべきである、キリスト再來の如き迷信を釀し易き信仰を維持する上に於て健全なる智識は特に必要である、宇宙は神の愛より出たる智識の作である、之を解するに愛と智識とが必要である、故に曰ふ「汝等勤めて信仰に德を加へ德に智識を加ふべし」と（彼得後書一章五節）。

世界の平和は如何にして來る乎

（一九一八年三月三日東京神田基督教青年會館に於て）

基督再臨に關する演說會の其回を重ぬるに從ひ興味を減ずる事なく依然として多數の來聽を見るは喜ぶべき事である、而して既に彼方此方に於て多少の反響あり、殊に一部人士の公然たる反對の聲を擧げたるを多とせざるを得ない、素より彼等ユニテリアン派の人々がキリストの再臨を信ずる能はざるは當然の事である、然しながら怪むべきは斯派と余輩との中間に立ちて其旗幟を不鮮明ならしむる多くの牧師神學者等の態度である、彼等は此問題に關して聖書を如何に解釋せんと欲する乎、新約聖書中に反覆叙說數百回の多きに上る此問題を曖昧模糊の裡に葬り去る事は出來ない、「然り」乎、「否」乎、敎役者たる者は今や須らく其一を明白に選擇すべきである。

而して此事に關し余輩に對して下されたる批評は少からずと雖も其最も興味ある者は余輩のキリスト再臨の提唱を以て窮餘の活路を求めんとするにありと做す所の者である、蓋し此批評當らず且當れり、若し其所謂「活路を求む」とは新聞記者又は代議士の言ふが如く「糊口に窮したる」の謂なりとせば其言たる賤劣にして且虛妄である、然れども或る他の意味に於ては又一面の眞理を語るものと爲さるを得ない、何となれば余は糊口に窮せざるも聖書の解釋に窮したのである、余の從來の信仰のみを以てしては最早や聖書に就て語るべき事が盡きたのである、余は近頃に至り幾度びか『聖書之研究』誌を廢刊せんと欲した、殊に宇宙人生に關する大問題の余に迫り來るや余は遂に行き詰つたのである、然るに驚くべし其時に當り久しく余の心中にsubconsciousness（自覺以下の感覺）として潛在せしものが突如躍動し來りし爲め玆に忽ち活路は開かれたのである、然り之が爲に余は一變し余の心中に思想は湧出するに至つた、聖書は其創世記より默示錄に至

る迄大なる光明を發し其他余の今日迄讀み來りしものが皆な蘇生した、加之從來余の思想の傾向に合致せざりし形而上學に關する頭腦も亦新たに開けて近時余が哲學書數十頁を繙かざるの日は稀れである、余は又甚だ演說を好まざりしに拘らず今や獨り東京のみならず關西に又北海道に遠征を試み幾百回の講演をも辭せざらんとしつゝある、卽ち余をして此の如くならしめたるの意味に於て再臨の信仰は實に余の爲めに活路を開いたのである。

* * * * * *

末の日にエホバの家の山は諸の山の巔に堅く立ち、諸の嶺よりも高く擧り、凡ての國は流の如く之につかん、……エホバは諸の國の間をさばき多くの民を攻め給はん、かくて彼等は其劍を打ちかへて鋤となし其鎗を打ちかへて鎌となし、國は國に向ひて劍を擧げず、戰鬪の事を再び學ばざるべし（イザヤ書二章二—四節）。

ひとりの若者我等の爲に生れたり、我等は一人の子を與へられたり、政事は其肩にあり、其名は不思議なる戰士また大能の神、永遠の父、平和の君と稱へられん、其政事と平和とは增し加はりて窮りなし、且ダビデの位に坐りて其國を治め今より後永遠に公平と正義とをもて之を立て之を保ち給はん、萬軍のエホバの熱心之を成し給ふべし（同九章六、七）。

シオンの女よ大に喜べ、エルサレムの女よ呼ばれ、視よ汝の王汝に來る、彼は正しくして救拯を賜はり柔和にして驢馬に乘る……我れエフライムより戰車を絕ちエルサレムより軍馬を絕たん、戰爭弓も絕たるべし、波れ國々の民に平和を諭さん、其政治は海より海に及び河より地の極に及ぶべし（ゼカリヤ書九章九、十）。

今より十數年前紐育に於て非戰會議が開かれた事があつた、各派の人々之に加はりユダヤ人も亦多く出席した、其中の一人なる或るラビが會議の席上に於て立て曰うた「二千七百年の昔我等の預言者イザヤが『彼等は其劍を打ちかへて鋤となし云々』と世界の平和を預言してより戰爭廢止の理想は深く人類の心に植付けら

れ爾來種々なる反對は常に絶えざるに拘はらず人類は今日尙其理想を棄つる事が出來ないのである」と、實に然りである、預言者の言は夢に似たるも夢に非ず、之れが人類の理想である、何時かは斯くならざるべからずと何人も翹望するのである、語るべきは夢である、理想である、方便は人之を忘れん、然れども理想は之を忘れない、理想は深く人類の心底に潛みて子々孫々に流るゝのである、かくて平和の理想も亦世々相傳へて今日に及んだ、西洋の文學之を謳ひ日本の論客之を論ずるのである、平和は實に人類の最も切なる理想である。

平和は人類の理想である、聖書は明白に之を敎ふる、然し乍ら聖書は唯に理想を敎ふるのみではない、如何にして此理想を實行すべき乎、平和實現の手段方法、之れ亦聖書の敎ふる所である、聖書を讀みて其示す所の眞理の前後を截斷するは甚だしき誤解である、「心の貧しき者は福なり」、何となれば「天國は卽ち其人のものなれば也」、二者相待て初めて完たし、其の如く「彼等は其劍を打ちかへて鋤となし……國は國に向ひて劍を擧げず、戰鬪の事を再び學ばざるべし」、如何にして然る乎、曰く「ひとりの人我等の爲に與へられん」である、「エフライムより戰車を絶ちエルサレムより軍馬を絶たん」、如何にして乎、曰く「視よ汝の王汝に來る、彼は云々」である、知るべし聖書は萬國の平和を說くと共に亦之が爲めに或一人の來臨を告ぐる事を、神は必ず永遠の平和を降し給ふ、之れ聖書の明示する第一の眞理である、神は其手段として萬物を己に服はせ得るの力を有する其子を降し給ふ、之れ聖書の明示する第二の眞理である、平和は來らん、然れども人類の平和運動に由てに非ず、ひとりの人我等の爲に天より降りて之を齎すのである。

然らば世界に平和を來らすの方法は他に無いのである乎、其方法として三のものを考へる事が出來る。

其第一は戰爭である、戰爭の爲の戰爭に非ず、戰爭を廢止せんが爲め卽ち平和を來さんが爲の戰爭なりとは今回の戰爭に就て屢々聞く所の聲である、殊に米國の

如きにありては此理由の下に凡ての平和論者は沈默を守り國民は擧て戰爭の爲に熱狂しつゝある、其或る敎會より發行せし小冊子(パンフレット)に曰ふ「昔は神は紅海にパロの軍勢を沈め給へり、然れども今や神の審判は大口徑の大砲にあり」と。

果して然る乎、然らばかの世界最大の巨砲を有する獨墺は如何、彼等は神に代りて世を審判(さば)く者である乎、ナポレオン嘗て曰へるあり「攝理は常に强き軍隊の側(かたはら)にあり」と、誠に危險にして且薄弱なる議論と言はざるを得ない、今は沈默せる米國の平和論者ジョルダン博士が戰前毎年スタンフォード大學に於て爲したる講演に於て彼は獨逸のガドケの言を引きて繰返し說いて曰うたのである「戰爭は戰爭を廢する能はず、却て之を生む」と、而して博士の此言は疑ふべからざる眞理である、戰爭は決して戰爭を以て終局に達せず、日淸戰爭は日露戰爭を生み日露戰爭は又今回の戰爭の誘因を成したのである、日露役中最大の死傷者を出したる沙河の會戰を評して「文明とは此の如きものなり」と嘲りし人があつた、而も之を以て到底今回の戰爭に比ぶる事は出來ない、戰爭は徒らに戰爭を擴大せしむるに過ぎないのである、博士又曰ふ「戰爭に勝つは之に敗るゝよりも不幸なり」と、然り羅馬、佛蘭西等の歷史みな之を證明す、戰爭は遂に平和を來すの手段ではないのである。

第二は外交又は平和運動である、然し乍ら外交の如何に無能なるかは人のよく知る處である、政府使節を他國に派遣し其國の官民爭うて之を歡迎す、饗宴は饗宴に尋ぎ接待は接待に加はる、かくて兩國親善の聲耳に喧しき時に當り何ぞ圖らん翌日電報は傳へて言ふ、……(事實は決して盟約に伴はない)、外交とは畢竟此類のものに過ぎない、試に海牙(ヘーグ)平和會議の歷史を繙き見よ、此會議の主唱者は露國前皇帝であつた、而して露帝を慫慂(しようよう)したる者は平和に戀々たりし英國女王ヴィクトリア陛下であつた、女王は戰爭を惡む事甚しく嘗て再び決して宣戰の詔勅に署名せじと決心した、然るに後英國民熱狂して南阿の二小共和國を窘迫(いぢ)めんと欲し

女王に對して宣戰の署名を強要せし爲め老女王の心を痛むること甚しく遂に其餘生を短からしむるに至つたと云はれて居る、此女王の勸誘と經濟學者プロッホの平和論とに促されて成りし海牙平和會議は果して何を爲した乎、一八九九年及び一九〇七年の兩度の會議の結果議決せられし處を今日より見れば實に滑稽である、曰く「風船上より彈丸若くは爆裂物を投下する事を禁ず」と、曰く「毒瓦斯の使用を禁ず」と、曰く「ダムダム彈の使用を禁ず」と、此の如き議決は今日何人が之を信ずるであらう乎、獨逸の飛行機は毎週の如くに倫敦市の上空を見舞ひて幾多無辜の婦女老幼を殺戮して居るではない乎、而して之に對し英國の飛行機も亦同じ復讐を試みて居るではない乎、毒瓦斯は盛に使用せられて二十世紀の歐洲の天地に古きアッシリア歴史の殘忍暴虐を繰返して居るではない乎、列强の外交官一堂に集り三鞭を拔いて平和を議するの結果は概ね此の如し、實に笑ふに堪へたりである、誰か外交に由て世界の平和の到來すべきを信せん、外交は一時の緩和策たるに過ぎないのである。

第三は基督教會である、然しながら教會も亦戰爭を防止するの力なき事は前のハーバード大學總長エリオット博士の言ひしが如くである、博士の曰く「基督教會は今回の戰爭を防止する能ざりし事に由り自己の無能を曝露せり」と、嘗て瑞典那威兩國の間將に干戈を交へんとするや、教會は何の爲す所なく纔に社會主義者の戰爭參與拒絶の議決に由て事なきを得たのである、基督教會は此點に於ては社會主義者にも及ばないのである、教會は常に四分五裂す、それが一團となつて行動する事既に至難事である、況んや國民の戰爭熱に醉ふ時に當り聲を揃へて平和を唱へ非戰を叫ぶが如きをや、先般紐育の一新聞に戲畫を掲載した、時はクリスマスの頃であつた、諸教會の牧師集まりて新しき讃美歌を習ふ、歌に曰く「地には戰爭、人には惡意あれ」と、而して彼方に風彩の揚らざる一人の教師は古き讃美歌なる「地には平和人には恩惠あれ」を歌ひて衆人の爲に蹴出されつゝあるので

ある、一片の戯畫其中に深き眞理を藏するのである、基督教會が一團となつて戰爭を防止し世界の平和を來さんといふが如きは實に痴人の夢である。

平和は戰爭に由て來らず、外交に由て來らず、教會に由て來らず、然らば平和は遂に來らざる乎、人類の最も切なる理想たる平和は遂に來らざる乎、かの戰慄すべき戰爭は如何にして絶滅するのである乎、何人も之を知る者がないのである、人は徒らに戰後の教育、戰後の經濟を云々するも戰爭其ものを如何にして終熄せしむべきかを知らない、而して戰爭は戰爭を生み禍害は禍害を生みて今や全世界は行き詰らんとして居るのである、かの預言者イザヤの理想は遂に夢に過ぎないのである乎、萬國の平和は永遠に實現しないのである乎、否な決して然らず、平和は神御自身之を降し給ふのである、神は其獨子を再び世に遣りて彼の肩の上に世界の統治を置き給ふのである、而して彼が宇宙萬物を己に服はせ得るの力を以て永遠の平和を此世に實現するのである、平和は獨り彼に由て來る、彼を信ぜずして平和論を唱ふるも畢竟之れ一の囈語に外ならないのである。

世界の平和は如何にして來る乎、人類の努力に由て來らず、キリストの再來に由て來る、神の子再び王として來る時人類の理想は實現するのである、諺に曰ふ「男子の職分は出でゝ戰ふにあり女子の職分は家に在りて泣くにあり」と、然れども若し此の如き狀態にして永續せば神の造化は失敗に終るのである、然れども神はキリストの再來に由て遂に戰爭を廢止し人の眼の涙を悉く拭ひ給ふのである、キリストの再臨は實に世界問題唯一の解決である。

信仰の三階段

（一九一八年三月十日午前大阪天滿基督教會創立四十年紀念會に於て）

それ神は預じめ知り給ふ所の者を其子の狀に效はせんと預め之を定む、こは其子を多くの兄弟の中に嫡子たらせんが爲めなり、又預め定めたる所の者は之を召き召きたる者は之を義とし義としたる者は之に榮を賜へり（羅馬書八章廿九、卅節）。

余は大阪天滿基督教會とは甚だ緣故の深き者である、過去十二年間に亘り余の此教會に於て講演を爲す事凡そ十回、而も余は未だ曾て大阪市中他の場所に於て講演を試みた事がない、然るに今又來りて此教會創立四十年の記念會に臨むは奇緣と稱せざるを得ない、此時に當り余は特に祝賀の意を表せんが爲に來るも亦不可なかつたであらう、而して更らに奇なるは今年は余自身に取つても亦信仰生活に入りてより第四十年に相當する事である、即ち余の基督教的生活と此教會とは其齡を共にするものといふべく、四十年の信仰生活を續けし者が四十年間主の加護の下に存在したる教會に來りて其記念會を祝するを得るは不思議なる神の導きである、然らば余は茲に如何なる語を以て祝意を表すべき乎、他なし余自身の四十年の信仰生活の概要を述ぶるに如かない、事は余一個人に係はるが如くなるも余の基督者としての實驗は又凡ての基督者の實驗である。

余は今日特に羅馬書第八章に就て語らんと欲す、瑞西の聖書學者にして世界に有名なるF・ゴーデー曰く「若し聖書を煑詰むるならば之を羅馬書となすを得べく羅馬書を煑詰むるならば之を其第八章となすを得べし」と、即ち彼は羅馬書八章の中に聖書全體の意義を探り得べしと做すのである、而して其第廿九第三十の兩節の如きは其事を示して餘りがある、信者の信仰的生活の概要は此中に明示せらるゝのである。

神は如何なる聖旨を以て人を召して信者と爲し給ひし乎、之を敎ふるものは即ち

第廿九節である、神は人類を愛するの餘り自ら心に定め給ひし者を其子キリストの狀に傚はせんとて豫め之を選び給うたのであるといふ、卽ち御子キリストをして唯一人の子たらしめずして彼と共に多くの兄弟を作り給ひ彼をして其中に嫡子たらしめんが爲めであるといふ、神は何故或人を選び或人を選び給はざる乎、之を人の側より窺うて量る事が出來ない、然しながら神の側に在りては其の信者を選び給ふや必ず之をしてキリストと同じ性質のものたらしめん事を其の最後の目的とし給ふ事を茲に明示されたのである。

神の此目的は如何にして實現したる乎、その經路を示すものは卽ち第三十節である、曰く「定めたる者は之を召き、召きたる者は之を義とし、義としたる者は之に榮を賜へり」と、卽ち知る茲に召き又義とし又榮を賜ふの三階段ある事を、而して之れ信者各自の生涯に於ける實驗に照して解するを得るの事實である。

先づ余自身が召かれたるの實驗を有するのである、明治の初年諸種の事情に促されて當時尙ほ外國の如くに思惟されたる北海道札幌に赴かざるを得ざるに至りし其事既に余が神に導かるゝの途であつた、彼地に至るや有名なる米國の基督敎的科學者W・S・クラーク氏在るありて既に道を傳へられたる其圈內に入りし事之亦召きの一であつた、加之多くの信仰の友を與へられ共に道を研究し得るに至りし事亦然りである、然し乍ら之れ皆外側の召きにして之に加ふるに內側の召きがあつた、神は御自身に就き多くの事を余の心中に敎へ給ひし後遂に或時余の何者なるかを明かに示し給うた、余は其時まで世の腐敗を歎き人の罪を憤り大に社會を改め國を救ひ罪惡に反對し正義を唱へん事を期したのである、然るに神は余の心に臨みて言ひ給うた、曰く「汝こそ其罪人である」と、そは恰もダビデ王がナタンに對し或人の罪を怒りし時ナタン答へて「汝こそ其人なれ」と言ひしが如くであつた（サムエル後書十二章七節）、之れ余に取りて最も痛き經驗であつた、然し乍ら今にして思へば其時こそ眞に余が神の召きに與りたる時であつたのである、爾來偶々此召きに

與らざる所謂基督信者あるを見る毎に此經驗を有する事の如何に福なりしかを思はざるを得ない、斯の如く神は内より外より其驚くべき攝理と聖靈の導きとを以て余を衆人の中より召き給うたのである、其理由は量り難しと雖も召かれたるの事實は之を疑ふ事が出來ない。

召かれたる後の余は如何であつた乎、此召きに應じて之に應はしき生涯を送らざるべからずと、之れ余の決心であつた、されば其時迄余の胸中にありし國家社會人類等に關する問題は悉く消滅して唯如何にして余自身を神の前に義しき者と爲さん乎、此惱める人を如何にせん乎の問題のみが殘つたのである、故に余は此最大問題を解決せんが爲に微なりと雖も日本政府の官吏たりし當時の余の地位を拋ち父母兄弟友人の反對をも顧みず國を去て米國に渡つた、而して彼地に至りても余は或病院の看護人となり最下層の病人殊に白痴小兒等を救護し最も低き勞働に從事したりしは卽ち一に「如何にして自己を神の前に義とせん乎」との努力に外ならなかつたのである、當時余の渾身の努力は何等かの方法を以て聖書に示すが如き聖して義しく、自己を離れたる人たらんと欲するにあつた、然し乍らかゝる努力は終に無益に終つた、余は自己を聖くせんと欲すれば欲する程却て自己の汚穢を認めたのである、外側の行爲を聖めんとすれば内心の醜惡は愈々明かになつたのである、善を行へば善を誇るの心起り、余は到底高ぶりの人、罪の子たるを免れざる事を知つたのである。

斯くして失望の極に達したる時余の場合に於てはアマスト大學前總理シーリー先生が余の指導者であつた、卽ち人の義とせらるゝは行爲に由るに非ず、信仰に由る事を余は始めて彼より敎へられたのである、「汝の義とせらるゝは汝の努力に由るに非ず、汝自身如何に自己を聖めんと欲するも聖むる能はず、汝の義は汝自身に於てあるに非ず、汝の罪の爲め其身を十字架に釘けられ給ひしかの主イエスキリストに於てあるなり、故に自己の努力を拋棄し唯彼を仰ぎ見よ、然らば救はれ

ん」と、此事を知つて余の重荷は忽ち余の雙肩より落ちたのである、神の前に自ら義人たらんとのみ焦りし余は是に於て眼を擧げて十字架上に寶血を流し給ひしキリストを仰ぎ依て以て義とせられたのである、卽ち既に召かれたる余は今や義とせられたのである、余は玆に救拯の第二階段を登つたのである。

此福音は余に取て實に貴重なるものであつた、余は之を聞きて又他を聞くの必要を知らなかつた、之だにあらば歸國して我が同胞に福音を宣傳するに足ると、斯く考へて余は再び友人等の忠告に耳を傾けず勇躍して歸朝の途に上つた、而して爾來既に三十年シーリー先生より敎へられたる此福音が今尙ほ余の宣傳する福音として存するのである、此以上また如何なる光の余に臨むとも余は此貴き福音を非認する事は出來ない、余自身が罪人なる事、而してキリストに由て義とせられたる事、此二階段は余の既に經過せし處にして假令如何なる事情ありとも再び之を下降する事は出來ないのである。

然しながら余は此處にも亦永く止まる能はざる事を知つたのである、余はキリストに由て義とせられたりと雖も而も未だ完全に救はれたる者ではない、之れ事實の證明する處である、試に余の傳道の結果を見よ、余が精神を盡し心意を盡して爲したる傳道と雖も失敗は多くして成功は少し、福音を傳ふる事幾千人にして信じたる者は少數である、信じて之を維持する者に至ては更に極めて少數である、其他余の傳道の結果として見るべきもの甚だ少し、之をしも余の福音宣傳の結果なりと思へば余は失望せざるを得ないのである、又之を自己に就て考へん乎、素より福音に接して余は大に聖められたのである、其事は自己一人に顧みて之を知り難しと雖も偶々四十年前の舊友にして神を信ぜざりし人々に遭遇する時彼我の間顯著なる相違の存する事を感知せざるを得ない、福音を信ずるの結果の偉大なるは實に明白である、然りと雖も比較の標準を人に取らずして神の子イエスキリストに取らん乎、乃ち到底余を以て彼に比する事は出來ないのである、神の余を

召き給へる目的は其子の狀に傚はせんが爲めなりとあるに拘らず、彼の狀と余の現狀との差は天壤も啻ならざるものである、是に至て余は再び失望せざるを得ない、福音の他人に及ぼせる結果と其自己に及ぼせる結果とは相俟ちて余をして大なる不安を感ぜしむるのである、神は召きたる者を義とし、義としたる者には榮を賜ふとある、余は召かれ且義とせられたりと雖も未だ榮を賜はらないのである、卽ち余の救拯は未だ完うせられないのである、かくて余は更に信仰の第三階段を上らざるを得ない。

然らば榮は何時之を賜はるのである乎、そは現世に於てゞはない、次の世に於てキリスト再び顯はれ給ひ我等に榮光の體を與へ彼れの國を此世に建設し給ふ其時我等は榮に入るのである、事は未だ未來に屬す、然れども現在に於て之を認め之を信ずる事が出來る、信者は未だ榮光を賜はらざるも神必ず之を賜ふ事を今日此處に於て確信する事が出來るのである、故に現世に於ける信仰的生活の階段としては希望を以て其第三段と爲すべきである。

而して此希望を確められて信仰は更に大發展を爲すのである、義とせられし事素より大なる福音である、然し乍ら義とせられし者が更に其身體の復活並に榮化を被り其靈の完全なる聖潔に與かり殊に復興せられたる萬物の中に置かれて神の榮光を仰ぎ見るを得んとの大希望を抱かせられて人生はまた一段の大發展を爲さゞるを得ない、余は信仰生活を始めてより四十年後の今日に至り此恩惠に接するを得て感謝に堪へざる者である。

神は人類を愛するの心より之をして御子キリストの狀に傚はしめ以てキリストの弟分たらしめんと定め給ふ、之れ神の御心に於ける信者選擇の目的にして所謂神の豫定である、而して神の此目的が人類の實驗として現はるゝ時に茲に信仰の三階段を生ずるのである、卽ち始に召あり、次に義とせらるゝあり、終に榮を賜はるあり、神は先づ外側の境遇と內心に於ける罪の自覺とを以て我等を召き給ふ、

次に我等が多くの無益なる努力を重ねし後十字架上に於けるキリストの贖罪を認むるに由て我等を義とし給ふ、而して最後に末の日に於て我等に榮を賜ふ事を確實なる希望として認めしめ給ふのである、神の豫定は永遠の過去である、其發現たる召きと義とせらるゝとの實驗は卽ち現在の事實である、而して其結果たる榮光の賜與は之れ永遠の未來である、羅馬書第八章の此短き兩節の中に永遠の過去より永遠の未來に亘る信者の運命が明示せられたのである、最後の一段は現世に於て實現せず希望として存る、然れども此希望たるや極めて確實なるものである、パウロが玆に「榮を賜へり」と言ふは畢竟其の必然の未來なるが故に既定の事實として之を言うたのであらう、而して實に此希望あるに由て我等は救を得たのである、故に曰ふ「我等が救を得るは望によれり」と（廿四節）。

されば余は切に望む、此教會に於ても信者各個人としても亦教會全體としても此信仰の階段を辿られん事を、殊に未だ來らんとする世に於ける榮光を認めざる者は今日此大なる榮光を認めて感謝と歡喜とに滿つる生涯に入られん事を。

信仰の三大時機

余の生涯に信仰の三大時機があつた、其第一は自己を發見せし時であつた、寧ろ神に發見せられし時であつた、自己が罪人たる事を發見せられし時であつた、其後當分の間余の最上の努力は自己をして神の前に淸且つ聖なる者たらしめん爲に向けられた。其第二は余が余の義を發見せし時であつた、而も余自身に於てに非ず余の罪の爲に十字架に釘けられ給ひし彼に於て之を發見せし時であつた、余は其後當分の間キリストと彼の十字架の福音を自他に於て實現せんと努めた。其第三にして多分最後の時機は余が余の救拯は未だ完成せられたるに非ず、キリスト再び顯はれ給はん時に至て始めて余は彼に肖たる者と成る事を示されし時であつた、罪の自覺、信仰に由て救はるゝ事、キリスト再臨の希望……以上は余の靈魂が天國瞻望の歡喜と自由とに達する迄の三大階段であつた。

基督再臨の欲求

羅馬書八章十四—廿三節の研究

（一九一八年三月十日午後大阪天滿基督教會に於て）

羅馬書の第八章は基督教を收縮したるものである、若し聖書が金の指環ならん乎、羅馬書は其寶石にして其第八章は寶石の尖頭である、故に此短き一章の中に宇宙人生に關する最も重要なる眞理が包含せられて居なければならない、而して實に其十四節乃至二十三節の如きは確かに其れである。

此の數節は宇宙の希望と人類の希望と兩ながら之を簡單明瞭の語を以て示すものである、十四節に曰ふ「凡そ神の靈に導かるゝものは是れ卽ち神の子なり」と、「導き」と言へば素より外界よりの導きを意味する、然るに其次節に至て又曰ふ「汝等が受けし靈は奴たる者の如く再び懼を抱く靈に非ず、アバ父よと呼ぶ子た

る者の靈なり」と、依て知る外界より我等を導き給ふ神の靈は又我等信者の衷に存して我等をして子たらしむるの靈なる事を、卽ち外なる靈の導きに與ると共に又內なる靈を賜はりたる者是れパウロが基督信者に就て下したる定義である、而して彼は又曰ふ「聖靈自ら我等の靈と共に我等が神の子たるを證す」と（十六節）、我等が神の子たるの證明は外にあり又內にあり、信者は自己が神の子とせられたるの事實を其生涯に臨みし奇しき攝理と合せて自己の靈に感ずる神の靈の實驗とに由て知るのである。

信者は神の子なりと言ふ、然しながらパウロは更らに進んで曰ふ「我等もし子たらば又後嗣たらん」と（十七節）、卽ち嗣ぐべき何物かを有する所の者なりとの義である、神は我等を子と認むるのみを以ては足らず、我等も亦神に子と認めらるゝのみを以ては足らない、子とせられたらんには其實證がなくてはならない、而して其には相應の賜物を受けなければならないのである、人其の子に向て汝は我

が子なりと言ひ子は親に向て我は汝の子なりと言ふとも其の果して子たらんが爲には之が證據を要するのである、故に「我等若し神の子たらば又後嗣たらん、必ずや或物を讓受くべし」と言へるパウロの言は誠に適當である。

「卽ち神の後嗣にしてキリストと共に後嗣たる者なり」と(十七節)、キリストが神の後嗣として受くべき物其物が亦我等の受くべき物であるといふのである、親の子に讓るや必ず親相應のものを以てす、富豪ならば富豪相應、貧者ならば貧者相應、其所有と位地との程度に應じて讓物を爲すのである、親が其子を己か子として認むるの證據は此處にある、其如く神も亦神相應の物を其子に與へ給うて神が眞に我等の父たるの證據と爲し給ふのである。

然らば神は我等に何を賜ふ乎、問題は是れである、神既に我等に靈を賜ひたりと雖も靈のみにては足りない、神の靈は我等の靈と共に我等が神の子たるの證明を爲すと雖も靈其ものは未だ以て嗣子の受くべき賜物の全部とするに足りないのである、抑も神の其子に賜ふ遺產は何である乎。

パウロは玆に直ちに其事を語らない、彼は殊更に問題を轉じて暫らく天地萬物に就て語るのである、曰く「それ受造物の深き望は神の子等の顯はれん事を待てるなり云々」と(十九節以下)、受造物とは今日の語にて之を言へば宇宙又は天地萬物である、而してパウロは言ふ「天地萬物は現在にありては敗壞の奴である」と、又曰ふ「天地萬物は今に至る迄人類と共に歎き且苦む」と、卽ち天然其ものが甚だ不完全なるものにして而も其の完全に達せん事を深く待ち望みつゝあるといふのである、而して少しく天然を觀察したる者は皆な此結論に達せざるを得ない、通常物の理想は之を自然に取る、人工は不完全なり天然は完全なりと言ふ、誠にソロモンの榮華の極みも野花一輪の裝ひに及ばないのである、然りと雖も天然其物が實は甚だ不完全たるを免れない、見よ待望一年にして漸く蕾を破りし櫻花は三日見ぬ間に忽ち散り失するのである、人の家庭の如き亦之を天然の現象として見

て其の快樂の暫時にして悲哀の直に之に臨み易きを認めざるを得ない、美はしき山野の間に毒草あり毒蛇あり毒蟲あり、又人の健康と生命とを奪ふ黴菌あり、動物界に於ける生存競爭あり、天然其物が敗壞の奴隷にして極めて不完全のものたるは何人も之を認めざるを得ざるの事實である、パウロの言ふ所は文字通りに眞理である。

天然は不完全である、然しながら不完全なるは獨り天然のみである乎、否な、人類全體も亦不完全である、加之信者其ものも亦不完全である、不完全なる人類あり、而して不完全なる天然あり、彼の完成を待ちつゝあるが如く此も亦完成を待ちつゝある、人類と天然、信者と萬物、其の不完全なる狀態を共にし其悲歎と勞苦とを共にし其終局の希望を共にす、此は彼の顯現を待ち彼は此の完成を望む、其事は果して何を示す乎、曰く人類の完成せらるゝと同時に天然も亦完成せられ而して其の完成せられたる天地萬物が完成せられたる人類に賦與せられんとするのである、故に曰ふ「己の子を惜まずして我等凡ての爲めに之を付せる者はなどか彼に添へて萬物をも我等に賜はざらんや」と（卅二節）、然り萬物である、完成せられたる宇宙、完成せられたる天地萬物である、而して神の子たり其の後嗣たる者の受くべき讓物は卽ち是れであると彼れパウロは言ふのである、實に壯大なる思想と稱せざるを得ない。

「たゞこれ等のものゝみならず、聖靈の初めて結べる實を有てる我等も自ら心の中に歎きて子と成らん事卽ち我等の身體の救はれん事を待つ」と（廿三節）、之に由て見れば我等が靈に於て潔められたるは聖靈の初穗たるに過ぎない、眞實の意味に於て神の子たるに至るは救拯の結果が身體に迄及ぶの時である、身體其ものが朽ちざる者となりて始めて收獲の時は來るのである、是れ卽ち信者の完成である、而して信者の斯の如くにして其救を完うせらるゝと同時に萬物も亦其救を完うせられ、玆に榮光の天然、完成せられたる宇宙が出現し而して其れが神の遺產

として子たる信者に賦與せらるといふ、其思想の雄大にして深遠なる誠に驚くべきである。

パウロが此書を認めし時彼は何處に在りし乎、エペソ乎コリント乎、或はカイザリヤの牢獄であつた乎、何れにせよ彼は此時甚だ貧困の身であつた、全地は羅馬皇帝に屬し彼れパウロの掌中には自己の所有と稱すべき一物も無かつたのである、然るにも拘はらず、彼は自ら神の子なるが故に又其後嗣たるを知り而して最後には全世界と其中にある萬物とが羅馬皇帝に屬せずして自己の有に歸すべきを信じて疑はなかつたのである、宜なるかな貧漢パウロの向ふ處全世界を席捲するの慨ありし事。

此の世は所謂現し世である、汚れたる世界である、敗壞と患難との奴隷である、然し乍ら此世は我等の棄つべきものに非ず、我等の救拯の完うせらるゝ時此世の救拯も亦完うせられ玆に完全なる宇宙が完全なる神の子に與へらるゝのである、

基督信者の希望は之より以下たる事が出來ない、神の造り給ひし驚くべき宇宙萬物が永久に惡人の手中に存し神を嘲る者の所有に歸すべき筈がないのである、世界が彼等の蹂躙に屬するは暫時の事である、時到らん乎、天地萬物一切の受造物は忽ち彼等の手より奪はれて眞實なる神の子に與へらるゝのである、完成せられたる全宇宙、是れが神の後嗣の讓受くべき遺產である。

今大阪の市に來りて其殷富を見るに此世の勢力の盛なるに驚かざるを得ない、日本の富は不信者の手に委ねられて居るのである、宇宙萬物は神とキリストとを知らざる者の支配に屬して居るのである、然しながら己の子をも惜まずして之を我等信者の爲に付せる者はなどか之に添へて萬物をも賜はざらんやである、此殷富、此美しき陸と海、此宇宙萬物が之よりも遙に美化されたる形に於て我等に賜はるべしとは聖書が敎ふる所の中心的眞理である、人の思想として之よりも莊大なるものがある乎、我等の受くべき賜物として之よりも偉大なるものがある乎、キリ

ストに於ける救の遂に此處にまで至るべきを知つて我等は唯驚歎し讃美するの外はないのである。

約翰默示錄第十三章の終に曰ふ、「此獸の數目の義を知る者は智慧あり、才智ある者は此獸の數を算へよ、獸の數は人の數なり、其數は六百六十六なり」と、六六又六、之れ人の狀態なりといふ、希伯來人に取て七は完全を表はすの數である故に六は完全に近くして之に達せざる者である、人の數は誠に六六六である、個人然り社會然り天然亦然り、然れども神の定め給ひし時到らん乎、六六六は一變して七七七となるのである、キリスト再び來り給ふ時信者は復活し萬物は復興し而して復興の萬物が復活の信者の手に渡され、かくて神の後嗣は其受くべき相當の遺產を受くるのである、キリストの再臨は人生と全宇宙とに關する最大問題である。

世界の最大問題

（一九一八年三月十三日夜京都基督教青年會館に於て）

「世界の最大問題とは何である乎、其中に種々なる問題を含むと雖も畢竟するに世界最大人物出現の問題に歸着するのである、政治といひ經濟といひ外交といひ究極する所人物の問題に外ならない、カーライル嘗て曰く「歷史は偉人の傳記である」と、是れ蓋し深き眞理である、世界より其偉人を除けば實に歷史がなくなるのである、日本より其天智天皇、藤原鎌足、源頼朝、北條泰時等の如き人物を除けば日本歷史は存在しない、西洋に於ても同樣である、歷史は其偉人に由て形成せらる、クロムエル、ワシントン、ビスマークといふが如き善にせよ惡にせよ偉人ありて始めて世界歷史があるのである。

而して此事は哲學より見て亦然りである、哲學最後の歸結は人格說（personalism）

である、人格は生命の最後且最高の顯現である、生命の其極に達したるもの卽ち人格である、故に萬物が最高の人格に達して其進化の極に達するのであると言ふ事が出來る。

故に何れの方面より見るも世界の最大問題は世界を統御し之を統一するに足る完全の人物は如何にして出現する乎に於てあるのである、近頃余は二冊の著るしき著書に接した、一は蘇國（スコットランド）の學者E・A・ヲードハウスの著"The World's Expectant—Study of Great Possibility"（世界の欲望—大なる可能事の研究）である、而して此書の論ずる所亦此處にあるのである、世は今日の如く亂れて其歸着する處を知らず、舊文明は破壞せられて新文明は未だ起らず、全人類は暗黑の裡（うち）に彷徨（さまよ）ふ、是に於て人類の要求する者は此難時に處するに足るの大人物の出現なりと唱ふるのである、著者は基督信者ではないやうに見ゆる、故に彼はキリストの再現を說かない、著者自身の立場は嘗て我國に於て米人オルゴット氏に由て唱へられしtheosophy（靈智學）に於てあるものゝ如くである、而もかゝる人が斯る說を唱ふるのみならず、此書の示す處によれば英國內に於て同一の說を唱へ同一の希望を抱く者數多ありて彼等が一の協會を組織し『星の告知（ワルド・オフ・ゼ・スター）』と稱する機關雜誌を發刊して居ると聞いて如何に彼國に於ても世界的大人物の出現を翹望しつゝある乎を知る事が出來るのである。

余の接したる第二の著書は之よりも遙に偉大なるものである、露國の詩人にして哲學者たるウラヂミール・ソロヴエフの著述である、ソ氏といへば世界的聲名を有する思想家にしてトルストイと共に並び稱せられたるものである、其思想の深遠なるに於ては恐らく遙かに杜伯以上であらう、斯人（このひと）數多の著述を爲したる後彼に尙ほ一の抑（おさ）ふる能はざる大思想があつた、彼は常に曰うたのである、「我にして此思想を發表するに非ざれば死する能はず」と、而して彼は遂に此思想を發表した、而して之を發表したる後齡四十二にして千九百年に世を去つたのである。

此書近頃『戰爭、進歩並に歴史の終末』なる題目の下に倫敦大學に由て英譯せられ且出版せられた、之に由て見れば著者は宗教家と稱すべき人に非ずと雖も彼は大膽且明白にキリストの再來を唱ふるのである、彼は世の決して戰爭に由て救はるべきものに非ず又外交に由て革まるべきものに非ずしてキリスト再び此世に現はれてのみ人類は最後の榮光に入るべきものなる事を唱ふるのである、余が近年讀みたる書中かゝる大膽且深遠なる思想の提唱に接した事はない、其戯曲的力倆に至てはシエークスピアに匹敵するか若くは其以上とも言ふべきであらう、此露國大思想家の唱導がキリストの再來にありたりと知つて其事のみを以ても此問題の決して一笑に附すべきに非ず大に沈思默考すべきものなる事を知るであらう。斯の如くにして歴史の方面よりするも哲學の立場よりするも又社會全體の心底の欲求よりするも將た又深遠なる思想家の理想よりするも玆に世界的最大人物の出現するに非ざれば世界は遂に救はれずとの結論に歸着せざるを得ないのである。

然らば世界の最大人物とは誰である乎、言ふ迄もなくナザレの人イエスである、此人以上の人物の世にあるべくもあらざる事は人類の輿論の既に定めた所である、詩人ゲーテの如く決して熱心なる信仰家と稱する能はざる人さへも此事に就ては同一の事を幾度ともなく繰返して居るのである、彼の語にして人口に膾炙するものに曰く

智識は如何に進歩するとも學術は其極に達するとも人類は決してかの四福音書に輝く基督教の完全なる道德美に達する能はず

と、其他有名なる歴史學者エワルド又はシエリング等數ふるに遑なき世界的大思想家も皆完全なる人といへばイエスキリストを除いて他に無き事を認めて居るのである、故に若し世に完全なる人の出現するとせばイエスキリストが再び現はるゝより他に途がないのである。

完全なる人に宇宙の勢力が賦與せられて初て世は完成に達するのである、完全な

る人のみでは足りない、之に宇宙の勢力が賦與せられなければならない、又宇宙の勢力のみでは足りない、若し之を不完全なる人に賦與せん乎、危險此上なしである、宇宙の勢力を己の爲にあらず神の爲め人類の爲に使用して誤まらざる人、其人は誰である乎、今日の世界を見るに實は此人物が居らない、獨帝（カイゼル）、ヒンデンブルグ、マッケンジー、ロイドジョージ、ウィルソン、ジョッフレー、クレマンソー、彼等はみな大人物たるに相違なし、然れどもその世界統御の任に當るべき人物に非ざる事は何人が見ても明白である、世界統御の立場より考ふれば之等の大立物も皆俗に所謂「團栗（どんぐり）の背比（せいくら）べ」に過ぎない、是に於てか遙に彼等以上に卓越して彼等を命令し一令の下に彼等をして其爭鬪を止めしめ而して豫言者の唱へしが如き完全なる平和を地上に齎（もたら）すべき人物が出現しなければならない、其人は果して何人であるべき乎、之等大人物の上に卓越する事恰も富嶽の函嶺山系の上に卓越するが如き大人物は誰である乎、卽ち神の子にして人の王なる彼れナザレのイエスを除いては他にないのである、故に若し世界最大人物の出現を要求するといふならば聖書に示す如きキリストの再來を要求するより他に途がないのである。

余輩の唱道するキリストの再來は之を種々の方面より主張する事が出來る、或は聖書に繰返せる明言より或は天然進化の理法より或は敗壞に苦しむ萬物の叫びより或は平和を欲求して已まざる人類全體の聲より之を唱ふる事が出來る、而して又茲に世界最大人物の出現の要求より此問題に接觸する事が出來るのである、之を迷信なり非科學的なり非合理なりと評する淺薄なる宗教家輩は誰である乎。

*　*　*　*　*

余輩のキリスト再來の唱導に對する非難攻擊の中には「非科學的」なりとの聲を多く聞くのである、而して此聲を發する者は誰なるかといふに科學の何たるかに就ては智識の甚だ乏しき神學者牧師傳道師其他宗教事業に從事するの輩である、然しながら眞に科學を研究したる者は能く科學の眞價を知るのである、科學は素よ

り甚だ貴きものである、之に由て人類の幸福の著るしく增進したる事は何人も疑はない、然し乍ら科學は或事に就ては何物をも我等に敎へないのである、科學は我等に神の在る事、靈魂、心意、自由、生命等に就ては何の敎ふる處がないのである、若し非科學的なりといふならば宗敎其物が非科學的である、道德其物が非科學的である、自由其物が非科學的である、科學の立場よりすれば原因なき結果あるべからずといふ、然るに人には自由意思なるものありて原因なき結果があるのである、科學は如何に之を說明せんと欲するも能はない、如何にして人が其手を擧げ得るか、其事さへ科學者には判明らないのである、斯の如くにして科學の範圍の甚だ狹きを知る者は余輩が宗敎的信仰を發表するに對して非科學的なりとの聲を發すべからずである、而して科學を學びし人卽ち眞個の科學者はかゝる反對の聲を擧げないのである、非科學的呼はりを爲す者は實は未だ曾て蛙一匹を解剖したる事なき所謂神學校出の神學者並に傳道者輩である、彼等の非科學的呼はり程價値の無い者はないのである、諸君宜しく彼等の聲に耳を傾くるなく彼等の言を信ずる事なきやう勸告す、再臨は非科學的なりと稱する輩が信者の葬式を司りて哥林多前書第十五章を朗讀するのである、然らば復活は科學的である乎、若し復活を信じ得べくば何故再臨を信じ得ないのである乎、非科學的なりといひて再臨を排斥する者は同一の理由を以て復活をも排斥すべきである、思ふに彼等は實は復活をも信じないのであらう、故に今後彼等が葬式に於て哥林多前書第十五章を讀む時には諸君宜しく彼等の言を僞善者の聲と見て之に耳を傾くべからずである。

基督の復活と再臨

（一九一八年三月三十一日神戸基督教青年會館に於て、又四月七日及び十四日に渉り東京神田バプチスト中央會堂に於て）

第一回

今や信仰の復興は全世界に磅礴（はうはく）たる新機運である、再臨の高唱は聖靈の導きに由る運動である、我國に於て此運動の開始せられたる此機會に當り堅くキリストの再臨を信ずる若き有爲の士にして海外より歸朝する者少からざるが如きは實に不思議なる攝理と言はざるを得ない、曩には神戸に於ける集會に際し余を訪ね來れる一舊知があつた、彼は二十年前高等商業學校卒業の後久しく倫敦其他に勤務し近頃歸國したる好本督君（よしもとたゞす）である、余は過ぐる復活日の朝彼と共に蘆屋（あしや）川の畔を逍遙し有名なる汐見（しはみ）の櫻の綻（ほころ）び初（そ）むるを眺め小丘に登つて暫らく信仰談を交はした、然るに驚くべし彼は再臨の信仰に燃えて居るのである、之を見て余は感慨禁ぜず、脚下一帶の松原に續く茅渟（ちぬ）の海を隔てゝ遠く淡路島を望む所に二人は共に篤き祈を献げた、而して生來臆病過ぐる程謙遜なりし彼が其日の午後に於ける集會の席上余の講演終るや直に壇に上つて熱心なる信仰の證明を爲したのである、此時に方りて此事あるは果して何をか意味する、然るに今又茲に均しく新歸朝者たる平出慶一君の信仰と知識とを兼備せる有力なる再臨論を聽くを得て歡喜に堪えない、此の如きは確かに神の攝理であつて我等の事業が神の特に命じ給ひしものなるの證據と言ふべきである。

而して此運動は決して獨り日本に於ける小運動ではない、英國及び米國に於ても同樣の運動あることは人の既に知る所である、然るに近時教友河面（かつら）仙四郎君（君は開戰に先だつ二年獨逸に留學し爾來敵國を脫出するの機を逸して遂に最後迄殘留し漸く昨年十一月許可を得て瑞西國バーゼル市に移つたのである、卽ち君は戰時中の獨逸の眞相を知れる我國唯一の權威（オーソリチー）である）……河面（かつら）君よりの音信によれ

ば獨逸に於て亦此戰爭の結果新神學は破壞若くは逆行を始めキリスト再臨の信仰著るしく勃興しつゝあり、殊に此運動は嘗て再臨信者の團體たるピーチスト（Pietist）に由て建設せられしハレー大學を中心として行はれつゝあるとの事である、又近頃牛津大學某教授の言に曰く「余の基督教は今日まで道理的なりしに今や信仰的となりつゝあり」と、之等の言はかの心理學者バウマンの指摘せる「今回の戰爭は獨逸の青年を驅りてニーチエの著書より新約聖書に赴かしめたり」との事實と相待ちて歐洲に於ける精神界の大勢の那邊に存するかを示すに足るのである、今やキリスト再臨の信仰は實に聖靈の指導に基く世界の機運である。

キリストの再臨は其復活との間に密接なる關係を有する、若し復活を聖書の示すが儘に信ずる事を得ば亦再臨をも信ぜざるを得ないのである、而して復活節は既に一週間前に過ぎ去れりと雖も天文學者ウルム、ウーデマン等の努力に成る計算に由ればキリストの十字架に釘けられ給ひたるは紀元後三十年の四月七日（太陽

曆）であつたといふ、即ち彼は千八百八十八年前の今月今日十字架に上り給うたのである、而して三日目なる四月九日の朝に於て復活し給うたのである、依て知る今日は彼の復活に就て學ぶに最も良き安息日なる事を、故に余は茲に哥林多前書第十五章に記されたる彼の復活をパウロの語るが儘に聽かんと欲する、是れ余輩の言に非ずしてパウロの言である、我等は暫らくパウロの書翰の受信人たる立場に立ちて本章を熟讀すべきである。

彼は先づ曰うたのである「兄弟よ曩にわが傳へし福音を更に又汝等に示す、汝等は之を受け之に賴りて立つ、汝等徒らに信ぜずして我が傳へしまゝに堅く守らば此福音に由て救はれん」と（二二節）、此處に「徒らに」と言へるは「早まりて」又は「能く究むる事なくして」の意である、福音の眞髓を能く究むる事なく復活再臨等の事を知らずして早まりて之を信ずる者は決して尠くない、千九百年前のコリントの教會に於ても爾うであつた、今日の日本の教會に於ても亦爾うである、

單に神は愛なりと聞きたるが故に、又は基督教は家庭社會の救濟上有効なりと認めたるが故に信者となりたる者の如き皆な此の類である、而して教會も亦此の如き人に洗禮を授けて敢て憚らないのである、甚しきに至ては神の存在をも信ぜずして唯だ正義が最後の勝利者たるを信ずるの故に洗禮を授けられたるの實例がある、然し乍らパウロは此の如き人々に對して明言したのである、曰く「我が傳へし儘を守らずば救はれず」と、蓋し彼の語の適中する信者は古今東西に其數甚だ多いのである。

次に彼は言うた「我が第一に汝等に傳へしは云々」と、第一とは時の順序に非ず、「最も重要なる事は」の意である、彼は茲に信仰の根本的教義の何たる乎を示さんとするのである、而してパウロが謂ふ所の根本的教義とは果して何ぞ、そは社會改善である乎、又は正義の承認である乎、又はキリストは人類の理想なりとの事である乎、否な、否な、パウロに取て最も重要なる問題は近代人の高唱する是等の事ではなかつた、「キリスト聖書に應じて我等の罪の爲に死し、又葬られ、聖書に應じて三日目に甦り、ケバに現はれ、後に十二弟子に現はれ給ひし事なり」と(三—五節)、キリストの死と我等の罪との密接なる關係、其復活、其顯現、是れパウロの稱して基督教の根本的教義と做したる所のものである。

而してパウロの說く所の甦りとは身體の復活なる事は「葬られ」云々の語に徵して明白である、靈的復活に非ずして肉體の復活である、キリストは其葬られたる身體を以て復活し而してケバに現はれ後に十二弟子に現はれ「次に五百人以上の兄弟に同時に現はれ次にヤコブに現はれ次に凡ての使徒に現はれ最後にパウロ彼自身にも現はれ」給うたのである、而して基督教の根本教義は茲にありと彼れパウロは茲に明言して居るのである。

然るに多くの基督者は今日果して此事を信ずるや否や、近代に於ける基督教歷史の大家レーキ教授の復活論に曰く「抑も復活の信仰の起源はマグダラのマリアが

キリストの墓に香物を献げんとて赴きたる時其墓の空虛なるを發見したるに始まる、然るにマリアはヒステリー症の婦人にして粗忽の餘り墓を誤まつて空虛の墓を見舞つたのである」と、果して然らば基督教は素と一病婦の錯誤の上に築かれたるものに外ならないのである、學者の說概ね此の如しである、彼等は曰ふ「肉體の復活の如きは科學的雰圍氣の間に棲息する近代人の信ずる能はざる所である」と、然し乍ら彼等の科學とは果して何である乎、世に價値なきものにして神學者の科學論の如きはないのである、而して彼等の解釋の如何に係はらずパウロは明白に肉體の復活を宣傳し尙附加して言ふのである、曰く「されば我にもせよ、彼等にもせよ、宜べ傳ふる所は斯の如くにして汝等は斯の如く信じたるなり」と（十一節）、實に論旨炳然として火を睹るよりも明かである。

是の故にキリストの肉體復活を信ぜざる者は聖書を棄つるに如かず、パウロの說く所は一點の疑を容れないのである、然るにも拘はらず黑を白と解釋せんとする

は近代人の心理狀態である、彼等は自己の思想を以て他人の思想を强ふるに巧みである、余は斯く信ずるが故に汝の論も亦斯く解せざるべからず、汝も亦斯く信ずるに相違なしと言ひて自己の思想を他人の說中に讀み込まんとするは彼等の癖である、嘗て詩人ブラウニングの晩年其名聲大に揚がりし頃であつた、彼は一夕倫敦街頭「ブラウニング研究會」の貼札あるを見、試みに入つて其狀況を視察した、偶々論題に供せられたるものは彼の戲曲の或ものであつた、會長は所謂新しき婦人にして其周圍に多くの小學者が坐して居た、而して甲論乙駁交々立ちて所說を述ぶるに一も彼自身の意味する所に當る者がなかつた、是に於て老詩人自ら一會員たるの風を裝ひ「其意味は斯の如く簡單明白なり」と說明するや忽ち全員の大反對を招いた、而も老詩人は讓らずして辯ぜしかば、己む事を得ずして會長は可否を起立に問ひしに詩人の贊成者は詩人自身の外一人もなかつたといふ、復活論や再臨論も亦實に其の如くである、パウロの言ふ所簡單明白なるに拘はらず、强

辯曲解相尋いで起り若し之を起立に問はゞ立つ者は彼れ筆者パウロ唯一人であらう、然れども事實は如何ともする事が出來ない、我等の信ずると否とに拘はらずパウロやヨハネやペテロの說きたる基督敎の根本敎義は肉體の復活にあつたのである、アリマテヤのヨセフの献げし墓の空虛なりし事を信ぜずして基督敎の信者と稱する事は出來ないのである。

パウロは又曰ふ「若しキリスト甦り給はざりしならば我等の宣敎も空しく汝等の信仰も亦空しからん……若しキリスト甦り給はざりしならば汝等の信仰は空しく汝等尙ほ罪に居らん」と(十四、十八節)、キリストの復活なくば傳道あるなし、信仰あるなし、救拯あるなし、罪の赦あるなし、復活なくして汝等の信仰は無效である、復活なくして汝等は尙ほ罪の中に居るのであると、而してパウロには之を言ふの十分なる道德的理由があつた、彼は其れを羅馬書四章の終に於て說明した、曰く「キリスト我等の罪の爲に付され我等の義とせられしが故に甦りたり」

と、卽ち復活は我等の罪の赦されて義とせられし證據である、何となれば復活なくんば我等は皆死せざるべからず、而して死は我等が罪人なるの唯一の證據である、人の罪を證明するものは此缺點彼短所に非ず、人の皆死せざるべからざる事其事が何よりの證明である、故に若し罪の赦あらば必ずや死せざる人とせられなければならない、然るにキリスト先づ復活し給ひ而して自己の復活を以て凡ての信者の復活を約束し給うたのである、玆に罪の赦の明白なる證據がある、若し此復活の希望なからん乎、罪の赦の證明何處にかある、復活なくんば救拯はないのである、復活なくんば信仰は無效にして宣敎の內容は空乏となるのである。

噫、之れ果して今日の福音である乎、社會改良を以て基督敎の根本義となし、會堂建築を以て宣敎上の最大事となし而して不信者に媚を呈して建築の資金を募集す、彼等は再臨の信仰を嘲けりて慨かはしき事なりと言ふも眞に憤慨すべきは實に彼等自身の此の如き陋態ではない乎、復活を信ぜず再臨を信ぜずして義を行ふ

事は出來ない、故にパウロは最後に强き警告を發して曰うたのである「汝等欺かるゝ勿れ、惡しき交際は善き風儀を害ふなり、汝等義に於て醒めよ、罪を犯す勿れ、汝等の中に神を知らざる者あり、わが斯く言ふは汝等を辱めんとてなり」と（卅四節）、誘惑せらるゝ勿れ、敎會の敎師信者にして復活再臨等を嘲笑する者あらば之と交際を爲す勿れ、汝等の諺にも爾か言ふにあらずや、汝等宜しく義に於て醒めよ、我れ斯く言ひて汝等を怒らしめ以て覺醒せしめんと欲するのであると、以て初代信者の如何に復活再臨等の信仰を重んじたるかを知るべきである。

過る日余は或る歐洲中立國の基督敎會の監督に遇うた、彼は善き人にして或事に於ては彼と余とは善き友人であつた、然るに彼は余に問うて曰うた「さて貴下はよもやキリストの處女降誕復活昇天再臨等を信じなさるまいな」と、此時迄打ち寛いで居た余は此意外の質問に接して襟を正しうした、而して漸く溫まらんとする友情を犧牲にするは忍びざりしと雖も其爲に余の返答を曖昧にする事は出來なかつた、余は思ひ切つて明瞭に答へた、曰く「余は信ず」と、是に於て彼は又尋ねた「何故に之を信ずる乎」と、余は再び答へた、曰く「キリストは余の心に奇跡的變動を與へた、余は此奇跡を行ひし人の復活と其人に由る信者の復活とを信ぜざるを得ない」と、基督敎國の敎會の監督にして神學の博士たる人が余に向てかゝる質問を發するのである、而して之れ今日の基督敎界の大勢を示すものである、彼等は基督敎を信ずと稱して實はパウロ等の根本的敎義と做したる所のもの卽ち是なくして福音なしと做したる所のものを排斥するのである、彼等は曰ふ、復活再臨等を信ぜん乎、近世文明を如何せんと、然しながら余は言ふ、聖書を如何せん、近世文明は棄つべし、然れども聖書は之を棄てる事が出來ないと、然り、聖書は近世文明よりも遙かに貴くある、而して聖書は明白に復活再臨等を以て宇宙の大眞理と做すのである、パウロ、ヨハネ、ペテロ等の傳へたる純福音は之等の眞理の上に立つて居るのである。

第二回

再臨の信仰に關する余輩の運動を評して基督教界に於ける放火なりと稱した者があるとの事である、余輩の運動にして若し放火ならんには現在の我國宗教界には何か燃ゆべき者があるに相違ない、卽ち我國の教會はパウロの据えたるが如き千歳の磐を基礎として其上に金銀寶石を以て建てられたるものに非ざる事を示すのである（コリント前書三の十二）、木草禾稿を以て建てたる家は神の言に由て燒き盡さるゝのである、而して余輩の運動ではない、余輩は再臨を唱へ平和を唱へ復活を唱へて唯だ聖書の註解を試みつゝあるに過ぎない。

再臨信仰反對論者に對して余は茲に權威ある二學者の言明を紹介せんと欲する、其一は獨逸の大聖書學者フランツ・デリッチである、十九世紀に於ける聖書學者にして彼の如く深遠且該博なるはなかつた、彼は其のイザヤ書第五十三章の研究中に曰く「如何なる言語學を以てするも本章を解すべからず（而して彼自身は稀有なる語學者であつた）、髑髏山上に立てられたる十字架の下に於て讀むに非ざれば此章を解する能はず」と、彼の如きは實に學問と信仰との和合したる偉大なる學者であつた、而して彼れデリッチがキリスト再臨を信ずるの理由に曰く「余は再臨信者なり、イエスも亦爾か在り給へり」と、其二は基督教會歷史に關する世界最大の權威たる有名なるアドルフ・ハーナック博士の再臨研究の一節である、博士曰く「初代の基督信者は福音と再臨とを同一視せり、キリストの再臨を離れて福音あるなし、而して彼等は此信仰の變更せられん事に大反對を表せり、故に若し現時の學者にして再臨中より一二の眞理を抽出し而して再臨其事を信ぜざらん乎、是れ初代の信仰を蔑視するものに外ならず、單純なる初代信者に取ては斯の如く重大なる問題は他に存せざりしなり」と、F・デリッチとA・ハーナック、再臨の嘲笑者は須らく先づ此二大學者の言に耳を傾くべきである、而して尙ほ對抗し得べくんば卽ち之を試むべきである。

而して初代信者に取て再臨の前提を爲し且つ其根本を爲すものは復活であつた、哥林多前書十五章の前半に於てパウロの論じたるが如く復活は罪の赦しに關する唯一の確實なる證明であつたのである、何となれば罪の證據は死にあり、故に若し罪を赦されなば必ずや死したる體は復活せざるべからず、然るにキリストは復活し給へり、我等も亦彼に倣ひて復活せしらめると、是れ初代信者の信仰であつた、而して復活を信ずる者に取て再臨は決して難問題ではない、復活昇天せるキリストの再來は最も信じ易き眞理である。

パウロは復活と罪の赦しとの關係を論じたる後更らに進んで復活に對する反對論を一掃せんと試みた、彼の所論の委曲は茲に述ぶるの遑なしと雖も其の論據何處にある乎は明白である、彼は反對論中二個の疑問を認めた、一に曰く「死人如何にして卽ち何の力に由て甦るべき乎」と、二に曰く「如何なる體をもて來るべき乎」と(來るべき乎の一言に彼の信仰の閃きを瞥見する事が出來る、卽ち彼は復活した

る信者のキリストと共に顯はれ來るべきを確信したるが故にかゝる不用意の間にも其意義を漏らしたのである)、是れ決してパウロの當時に於けるコリントの信者のみの質問ではない、今日の信者而も基督教會の教師までが此疑問を提出するのである、之れ千九百年前の質問にして又現在の質問である、而して多くの信者は之が解答に窮し學問的の說明は避けて觸れざらんと欲する、然し乍らパウロは斯かる難問題の解決を少しも躊躇しなかつた、彼に取て復活の眞理は餘りに貴重なりしが故に敢て自己の有する一切の知識を以て之を解釋せんと試みたのである。

パウロの智識的解釋は今日より之を見て或は不完全であるかも知れない、然しながら注意すべきは當時の人の決して我等の想像する如く無學に非ざりし事である、今に存せる古代希臘の戲曲は此事を證明して餘りがある、試に今日之を倫敦又は東京に於て上劇するも其思想高尙に過ぎて到底一般人士の理解する所とならないであらう、然るに二千年前の雅典(アテンス)に在りて老幼男女皆な之を賞觀したのであ

る、而してパウロの論敵はかゝる人々であつた、彼の所論舊しと雖も之を一笑に附すべからずである。

又彼が自己の有する凡ての學問を以て復活を説明せんと試みたるは復活其ものゝ疑ふべからざる事實なることを示すのみならず、凡て此種の問題に關し科學的説明を試むるの決して不可ならざる事を敎ふるものである、信者は多く學問を恐れ非科學的不合理的等の批評を聞いて最も心を痛む、然し乍らパウロの如きは然らず、彼は飽く迄も復活の眞理なるを確信するが故に、卽ち其斷じて迷信に非ざる事を確信するが故に之を理性に訊し科學に訴へて其宇宙の大眞理なる所以を明かにせんと欲したのである、我等も亦彼に倣ひ自己の信仰を自己の有する凡ての哲學科學を以て證明しなければならない、學問上の説明といへば直に之を拋棄して科學者の手に一任せんとするが如きは誠實なる信者の態度と稱する事が出來ない。

第一、如何にして復活する乎、パウロ曰く「愚かなる者よ」と、「考へざる者よ」との意である、考へざる者よ、汝等日常目前の事實を知らざる乎、汝等種子を蒔きしに非ずや、而して蒔きたる裸粒より美はしき靑草の生ずるを見しに非ずや、此簡單なる事實を如何、復活の眞理も亦斯の如しと彼は言ふのである。

生命は如何にして造らるゝ乎、是れ永遠に亘りて解くべからざる奧義である、秘密である、我等は唯其作用を知るのみ、誰か化學實驗室に於て生命を造る事を得む、人類の有する一切の知識を以てするも尙ほ生命中の最下等なるアミーバ一個を製造する事が出來ないのである、然り生命は秘密である、然し乍ら事實である、之を説明せんと欲して説明する能はず、神の存在を證明せよといふ乎、然らば汝の父の存在を證明せよ、否汝自身の存在を證明せよ、馥郁たる梅ヶ香は何處より出づる乎、何人も之を知らずと雖も而も其香を疑ふ者はないのである、音樂家ハイデン墺國維納に於て將に死せんとする時偶々人ありて彼が其思想を何處より得たるやを問ふ、ハイデン乃ち死の床に在りて天を指し答へて曰く「見よ彼處

より！」と、詩人ウオルヅヲルスは壁上一莖の草を歌うて宇宙の秘密其中に在りと叫んだ、カーライル曰く「汝奇跡を知らずといふ乎、然れども余は嬰兒の生れ且育つを見たり、之れ豈大なる奇跡に非ずや」と、復活も亦然り、汝復活を信ぜずといふ乎、然らばかの種蒔きを見よ、一粒の穀粒より或は三十倍或は六十倍或は百倍の實を結ぶに非ずや、若し此を信ずるならば亦彼をも信ずべきであると、パウロの所論決して薄弱なりと言ふ事が出來ない。

第二、如何なる體を以て來る乎、答へて曰く「體に種々あり、凡ての肉同じ肉に非ず、人の肉あり獸の肉あり鳥の肉あり魚の肉あり、又其の光榮卽ち美的狀態も同じからず、天上の物の光榮は地上の物と異なり、日の光榮あり月の光榮あり星の光榮あり、此星は彼星と光榮を異にす、死人の復活も亦斯の如し」と、（今日の神學者にして星の光榮の一々異なるを知る者果して幾人かある、パウロは彼等よりも遙に優秀なる天文學者であつたのである）、觀じ來れば神は無限の手段方法を有し給ふ、而して凡ての生命に其れ相應の體を賦與し給ふ、天的生命には天的光榮を有する體を、地的生命には地的光榮を有する體を賦與し給ふ、然らば潔められたる靈には又其靈相應の體を賦與し給はざらんやである、生物學者は或は分析の結果を指摘して「凡ての肉皆同じ」と曰ふかも知れない、然し乍ら神は同じ肉を以て或は尊き或は卑しき體を造り給ふのである、人の肉と獸の肉と其成分は均しとするも其光榮に至ては全然異なる、されば神の肉を處し給ふや其種類は決して我等の知る所の體のみを以ては盡さない、神は天使には天使の體を與へ潔められたる靈には其れ相應の體を與へ給ふのである。

生物學上生命に關する學說に二つある、其機械主義說（メカニズム）は曰ふ「體ありて生命あり」と、其活力主義說（ヴァイタリズム）は曰ふ「生命ありて體あり」と、而して前說は漸く衰へつゝある凡そ生命あらん乎、卽ち適當の體なかるべからず、神若し新らしき生命を賜はん乎、卽ち亦適當の體を賜はなければならない、靈と體と結合して初めて個人の存

在あり、體なくして靈のみを考ふる事は出來ない、愛する者の死は何故に悲しき乎、若し靈は體を離れて恰も牢獄より解放せらるゝに均しくば死は却て喜ぶべきではない乎・然らず、人として體を有せざるべからざる者が之を離るゝ時に無限の悲哀を覺ゆるのである、復活は人の普通の情に訴ふる深き眞理である。

或人は曰ふ、キリスト靈的に我等に宿れば卽ち足ると、果して然る乎、余等夫婦は愛する一人の女を失ひてより彼女が余等の內心に宿れるを知る、彼女と余等との關係は今や彼女の生時よりも更に密接である、然し乍ら斯るが故に余等は最早や彼女と面相接する時を希はざる乎、聖靈の內在は素より信者の喜びである、然れども若しかのエマオへの途上二人の弟子の前に主の現はれ給ひしが如く今此處に我等の前に其姿を顯はし給ひたりとせば如何、宇宙萬物を其手に保つ所の慈悲恩惠の主イエスキリスト今此處に立ちたりとせば如何、其歡喜と感謝とは正に無限である、友あり遠方より來る又說しからずや、靈の交通のみを以ては足らず、何時か山河百里を超えて彼の來り會する時友情の喜びは其極に達するのである。

靈あるも體なくして完全なる個人ではない、キリストの靈を受けたる者は亦之に相應する體を與へられて初めて完成せらるゝのである、而して其時は卽ちキリスト再臨の時である、再臨ありて信者の復活あり、復活ありて愛する者の再會がある、パウロ、ペテロ、ヨハネ、アウガスチン、ルーテル、クロムウエル等に、又嘗て共に祈りし多くの兄弟姉妹等に面と面と相合せて遇ふ事を得る其日の歡喜平安感謝は果して如何ばかりである乎。

今の人は口を開けば必ず肉體の事を言ふ、日々の新聞紙上肉體に關せざるの記事幾何ありや、都市の街頭肉に關せざるの店鋪幾何ありや、肉體は實に近代人の最も重んずる所である、然るに獨り宗敎に於ては肉體を排斥して顧みざるは何故である乎、肉體の救拯は人類の實際的要求である、而して又聖書の明示する眞理で

ある、聖書は靈魂の不滅を說かない、所謂靈魂不滅は基督教思想に非ずして希臘哲學思想である、聖書の高唱する所は却て肉體の復活である、而して肉體の復活ありて初めて靈魂の不滅は完うせらるゝのである。

最後にパウロは復活及び再臨の信仰と此世に於ける事業との間の深き關係に就て一言した、曰く「されば愛する兄弟よ、確くして動くことなく常に勵みて主の事を務めよ、汝等其勞の主にありて空しからざるを知ればなり」と、再來なく復活なくんば此世に於ける事業傳道皆な無效である、然れども復活ありて失敗を憂へず、無限の忍耐と待望とを抱き得るのである。

約翰傳に於ける基督の再臨

（一九一八年四月廿一日東京神田バプチスト中央會堂に於て）

キリストの再來に反對する者にして約翰傳に據る者が甚だ多い、故に約翰傳に於ける再來思想に對しは十分なる注意を拂ふの必要がある、今茲に約翰傳を以てする再來反對論の代表者として海老名彈正君の所論の一節（四月四日發行基督教世界所載）を紹介する、但し余は決して此問題を以て余の多年の知人たる同君と論爭せんと欲する者ではない、勿論君と余との間に個人的怨恨の如きは毛頭之を存しない、又之を存すべからずである、余は唯反對論者中の代表者として君を拉し來り而して君の說に照して聖書の示す所の眞理を闡明せんと欲するに過ぎないのである、君は曰ふ

所が其中に此問題に對して深遠なる說明を試むる者が出て來た、かのヨハネ傳は即ち夫れである、ヨハネ傳にはキリストの再來を否定しては居ないがしかし此問題は精神的に解すべきものであつて即ち神の靈が

我心に溢れて清くなり高くなり我等が平安を得るに至るは之れキリストの靈が我に來るに由るのであるとして居る、ヨハネ傳記者は此意味に於てキリストは精神的に我等に來り給ふのであつてキリストの心と我心と一致する事に由て其現在を自覺するといふ方面を明かにして來た、此立場から見ればキリストが雲に乘りて來るといふ思想の如きは淺薄なるユダヤ教思想の繼承であつて基督教本來の思想ではない、基督教本來の基督觀は神の子キリストの清く高き靈に於てキリストと結ばるにあるのであつた、そこに即ち神の國が出來るのである、故にキリスト再臨の信仰は異端の信仰にして須くクリスチャンの捨つべき妄說であると主張するに至つたのは一大見識と言はねばならぬ。

こは少しく過言たるを免れない、約翰傳記者は決して基督再臨の信仰は異端……妄說であると主張しては居ない、而も大體に於て斯く論ずるの理由が無いではない、キリストの再來を靈的に解するの思想は確かに約翰傳中に之を認むる事が出來る、例へば其第十四章十八、廿三、廿八節の如き又は第五章廿四節以下（本節に就ては別個の解釋の餘地なきに非ざるも）の如きが其れである、故に以上の反對論には一應聖書的根據ありといふべきである。

されば先づ反對論者に十分の地位を讓りて約翰傳には彼等の論ずる如く爾かありとしやう、而して後余輩は敢て問はんと欲するのである、然らば彼等は果して其他の點に就ても同樣に約翰傳を信憑するのである乎と。

約翰傳はキリストの神性を明言するに於て又その奇跡を高唱するに於て絕好の書である、曰ふ「道は即ち神なり」と、又曰ふ「トマス答へて彼に曰ひけるは我主よ我が神よ」と、之等の明白なる言辭は之を曲解すべきやうもない、奇跡に就ても亦同樣である、五千人の饗應の如き明白に奇跡として記さる、殊にラザロの甦生に至ては其の驚くべき奇跡たる事一點の疑をも容れないのである、然るに反對論者は曰く「約翰傳は歷史に非ずロゴス思想に基づく哲學的小說なり」と、而して彼等はイエスの神性問題奇跡問題復活問題等に就ては約翰傳を全然無價値の書として敢て顧みないのである。

若し約翰傳にして無價値の書ならん乎、何故に獨り再臨問題に關してのみ其權威

を認めんとする？　加之彼等の言ふ所によれば純粹なる基督教を求めんと欲すれば共觀福音書に赴かざるべからずと、然るに再臨を詳說する者は實に共觀福音書ではない乎、自己に利益ある時は何物をも取て之を利用し其の一度び自己を利する所なきに至るや直に之を拋棄するは實に現代人の一特徵である、而して自由神學者の聖書に對するの態度は卽ち之である、斯の如きは豈不誠實の極ではない乎、再來思想無きが故を以て約翰傳を信ずるならば卽ち同書に明言する所のイエスの神性と奇跡と復活とを信ぜよ、然らば遂に亦再來をも信ずるに至るであらう。

飜つて問ふ、約翰傳は果してキリストの再來を唱へざる乎、此問題に答へんが爲には更に關聯して研究すべき他の問題がある、卽ち約翰書及び約翰默示錄の著者如何の問題である、約翰書は約翰傳の序文又は附錄として同一記者に由て書かれたるものならんとは多くの聖書學者の一致する所である、默示錄に至ては一時反對說甚だ有力なりしに拘らず近時之も亦行き詰りの狀態に陷れりとは再來反對論の驍將マシウ博士の言である、而して基督教會に於ける傳說は三書を以て均しく使徒ヨハネの著作なりとする、三書が其根底的思想に於て相關聯するものなるの事實は之を疑ふ事が出來ない。

誰か默示錄に再臨なしと言ふ乎、默示錄は實に再臨の福音とも稱すべき書である、而して約翰書も亦其第一書二章廿八節、三章二節三節等に於て明白に再臨を唱ふるのである、故に若し教會の傳說の如く此二書共に約翰傳記者の著作なりとせば彼には再臨思想が充實して居つたのである、果して然らば約翰傳獨り再臨思想を缺如するものと言ふ事が出來ない。

而して約翰傳第十四章一節乃至三節はキリストの再來を說くものなりとは神學思想を以てせざる平信徒の純粹なる解釋であつて而も又聖書註解の王と稱せらるゝH・A・マイヤーの說明である、マイヤーの一言容易に嘲ける事が出來ない、彼は最も冷靜にして乾燥せる頭腦を有する學者である、而して約翰傳の此場所を彼の

如くに解釋する學者としては彼の他に尙ほカルビン、ルートハルト、ホフマン、ヒルゲンフエルト、エワルド等がある、又近時ロバート・ロー氏は其好著「生命の試驗」（約翰書註解）中に論じて曰く「ヨハネが高唱する所のキリストの內在はやがて其外的顯現を以て完成すべきものである」と、其他第六章卅五節以下に於て五度び繰返されたる「我れ末の日に必ず之を甦らすべし」の語の如き、又第廿一章廿二節に於ける「我若し彼が存へて我が來るを待つを望まば云々」の語の如き再臨を以て之を解するに非ざれば意味を爲さないのである、又第十一章に於けるラザロの甦生の如きは末の日に於ける復活の實物教育とも稱すべき者にして再臨に關する最も良き事實的證明である、加之暫らく彼言此語を論ずるを已めて約翰傳全體の思想を大觀せん乎、之れ卽ち復活的生命の福音であつて其終局は必ずや基督の再臨に至らざるを得ないのである。

約翰傳に於ける再臨の記述の比較的僅少なる所以は其の補充的福音書たるの性質にあるのである、約翰傳の成りし頃既に共觀福音書は教會內に流布せられて居つた、故に著者は之を補充せんと欲して筆を取つたのである、約翰傳がイエスのガリラヤ傳道に就て記す所甚だ簡略にして主としてユダヤ傳道を傳ふるは之が爲めである、教義に就ても亦同樣である、再臨の事は既に共觀福音書の重複して高唱したる所であつた、故に著者は自ら堅く之を信ぜしと雖も本書に於て詳說するの必要を認めず寧ろ之と相對してキリストの靈的臨在を唱道するの急務なるを感じたのである、且又著者自身の立場より見て彼は既に默示錄を著はして遺憾なく再臨を描寫したるが故に再び之を繰返すの必要なかりしのみならず、讀者の側に於ても重きを再臨に置くの餘りキリストの靈的臨在を輕んずるの傾向あるを認めたれば其弊を矯めんと欲して殊更に靈的福音を唱へたのである、同じ事實がテサロニケ教會に對するパウロの傳道に於て在つた、パウロ曩に彼等に對し再臨を高唱したるの結果信者が多くの誤謬に陷りたるを見て之を補はんが爲め記したるもの

即ち今日吾人の有するテサロニケ後書である、故に後書は前書の補充的書翰と見て其意義明白である、約翰傳と默示錄との關係亦然り、前者は後者の補充的著書である、此事實を知つて約翰傳に再臨の記事を掲ぐる事少き所以を容易に解決する事が出來るのである、然るに此明瞭なる解決を棄て他に種々なる解釋を試みんと欲すれば混亂は混亂に尋ぎ疑問は疑問を生みて盡くる所を知らないのである、近時E・F・スコット氏は其著『第四福音書の研究』中に於て論じて曰く「ヨハネと雖も時代の子である、其父母の思想より全然離脱する事は困難である、故に彼自身は再臨を信ぜざりしも偶々舊き傳來の信仰が彼の著書中に露出したに過ぎない」と、學者の詭辯とは斯んな者である、率直なる實驗に據る平信徒は斯かる學說に耳を傾けないのである。

天然的現象として見たる基督の再臨

（一九一八年四月廿八日東京神田バプチスト中央會堂に於て）

再臨研究演說會を始めたるは冬の最中の事であつた、爾來東京及び關西を通じて此會を繰返す事茲に十回、冬は去りて春は來り櫻花は開きて又既に散り失せたりと雖も獨り再臨問題に關する興味は依然として變らない、是れ此問題の決して余輩同志の運動に由て起りし者に非ずして神の提供し給ひし大問題なるが故に人心に觸るゝ事極めて深き證明である。

而して此問題が世の注意を喚起する事多きに從ひ余輩に對する反對の聲も亦益々大である、或は新聞に或は雜誌に或は余輩の許への投書に於て種々なる惡罵冷評は余輩に向て浴せ掛けらるゝのである、素より余一個の短き生涯に於ても世人の罵詈讒謗を受くるは今に始まりし事ではない、否此點に就ては余は日本に於て少

くとも最も多き經驗を有する者の一人であると思ふ、今より三十年前余は幾多の宣教師諸君より異口同音に「彼はユニテリアンなり」と嘲けられた、其結果として余は米國に於て有せし多くの信仰の友人を失つた、然るに怪しむべし當時斯の如く余を嘲けりし人にして今や或は自らユニテリアンとなり或は全く信仰を失ひし人が少くないのである、後數年余は又他の惡罵を受くるに至つた、曰く「亂臣賊子不敬漢」と、是れ日本全國民が余に被らしめたる汚名であつた、北は北見より南は薩摩に至る迄余を呼ぶに此名を以てせざるものはなかつた、恰も余に對して國賊呼はりを爲す事が其人の愛國心を證明するかの如き觀があつた、其結果余は宿るに家なく遂に時に變名を用ゐるの已むなきに至つたこともあつた、然るに如何、後數年にして所謂教科書事件の勃發するや曩に余を國賊と罵りし幾多の教育家が恥づべき收賄罪に問はれて續々と獄に投ぜられたのである、知るべし余を咒ひし者却て自ら咒はるゝの結果に陷りし者多きを、然らば即ち今や余輩の再臨の信仰を嘲りて迷妄と言ひ非科學的と呼び亡國的非基督教的と做す者甚だ多しと雖も此際何の辯護をか要せん、暫らく時を待てば事實は判明するのである、曩に余輩を嘲りてユニテリアンと言ひし者自らユニテリアンとなり國賊と呼びし者自ら國賊となる、されば今余輩を罵りて非科學的と言ふ者よ、乞ふ注意せよ汝等却て自ら非科學的の行爲に出でゝ恥辱を招かざらん事を。

茲に題して「天然的現象として見たるキリストの再臨」といふ、必ずしも再臨の科學的辯護を爲さんと欲するのではない、然しながらキリスト再臨の如き宇宙の大問題は諸方面より光を投じて之を明かならしむべきである、天然的現象として見たる再臨も亦聖書が示す所の明白なる事實の一である、

荒野と濕ひなき地とは樂み沙漠は喜びて番紅の花の如くに咲き輝かん、盛に咲き輝きて喜び且喜び且歌ひ、レバノンの榮を得カルメル及びシャロンの美はしさを得ん、彼等はエホバの榮を見我等の神の美はしさを見るべし……そは荒野に

水湧き出で沙漠に川流るべければなり、燒けたる沙は池となり濕ひなき地は水の源となり野犬の臥したる住所は芦葦の繁り合ふ所となるべし（イザヤ書卅五章）。

我れ思ふに今の時の苦は我等に顯はれん榮に比ぶべきに非ず、それ受造者の深き望は神の子等の顯はれん事を俟てるなり、そは受造者の虛空に歸らせらるゝは其願ふ所に非ず、卽ち之を歸らする者に因れり、又受造者自ら敗壞の奴たる事を脫れ神の子等の榮なる自由に入らん事を許されんとの望を有たされたり（羅馬書八章十八節以下）。

天使生命の水の河を我に示せり、其水澄徹りて水晶の如し、神と羔の寶座より出づ、城の衢の中及び河の左右に生命の樹あり、十二種の果を結び一種を月毎に結ぶ也、その樹は萬國の民を醫すべし（默示錄廿二章一、二節）。

宗敎の目的は人類の救拯にあり天然の如きは其及ぶ所に非ずとは普通の見解である、然しながら聖書の說く所は之と異なる、聖書は神が人類を救ひ給ふと同時に時到らば萬物をも改造し給ふ事を敎ふるのである、此の咒はれたる地球、此の山川草木禽獸、此の宇宙萬物が遂に贖はれて聖者の住むに適當なるものとせらるべき事を豫言するのである、前揭羅馬書八章十八節以下に於てパウロが論ずる所の大問題は卽ち之れである、彼は曰ふ「信者は神の子なるが故に又其後嗣である、然らば神の彼等に讓り給ふべき遺產は何である乎、曰く此世界である、時到らば此世界が改造せられて信者に賜はるのである」と、實に莊大なる思想である、パウロ此時カイザリヤの牢獄か又は旅中の假寓に於ける貧寒の身であつた、多分彼の所有としては蔽衣二三着の外何も無かつたであろう、然れども彼は歐羅巴亞細亞阿弗利加の大陸も遂に悉く改造せられて信者に賜はるべきを確信したるが故に恰も羅馬大帝國を自己の有の如くに見て縱橫に馳驅したのである、而して此の全世界の改造の實現するは言ふ迄もなくキリスト再來の時である。

預言者イザヤも亦パウロと同じく天然の改造を明白に預言した、前揭イザヤ書第

卅五章の如きは其一例である、而して彼れの偉大なる預言を解せんが爲には讀者自ら身をパレスチナの地に運ばなければならない、彼は曰ふ「沙漠は喜びて番紅の花の如くに咲き輝かん、……沙漠に川流るべし云々」と、此語は我邦の如く一の沙漠を有せざるのみならず殆ど不毛の地とては無く苟も土あらん乎卽ち產物ありといふが如き國に於て之を解釋するに困難である、然しながらイザヤの國土パレスチナは然らず、南にシナイ半島の沙漠あり、ヨルダンを超えて東にアラビヤ大沙漠あり、アラビヤの廣袤は露西亞を除きし歐洲大陸の全體に當り我が日本の十一二を其中に包容し得ると言へば其の如何に大なる乎を想像し得るであらう、而して此のアラビヤの大部分が唯だ沙より成る不毛の山と谷と平原とである、又かのサハラの沙漠の如きに至ては其面積正に米國四十有八州に匹敵するといふ、其他戈壁の沙漠ありトルキスタンの沙漠あり世界に於ける沙漠は決して僅小なるものではない、近來佛國等に於ては是等の不毛地に關する利用策を講じつゝありと雖も幾多の廣大なる沙漠は依然として地表に存續して居るのである、而してイザヤの如きは其生涯中常にかゝる沙漠を實見して居つたのである、然るに彼は憚らず高唱して「沙漠は番紅の花の如くに咲き輝かん」と曰うた（玆に云ふサフランとは多分水仙の意ならん、卽ち特に水を要する植物である）、又「沙漠に川流れ綠滴り人口繁殖の巷と化せん」と曰うた、之を靈的に解せば其れ迄なるも預言者の言は明白にして曲解を許さない、神萬物を贖ひ給ふの預言たる事は疑ふべからずである。

然らば萬物の改造は果して可能である乎、アラビヤの沙漠は果して豐饒の沃土と化し得るであらう乎、勿論神の力を以て能はざる事あるなし、然しながら神は天然の改造を行ふに方り多く天然的方法を以てし給ふ、故にキリスト再來に基づく萬物の改造も亦天然的現象として見て其の不可能に非ざる所以を知らば一層之を信じ易くなるのである。

試に地圖を披き見よ、アラビヤの北方に裏海あり、裏海の北方に大陸を隔てゝ北氷洋がある、而して裏海に棲息する動物中北氷洋産に酷似するものが少くないのである、例へば鱈又は海豹の類之れである、依て知る、裏海と北氷洋と二者嘗ては一度び接續し居たる事を、此推定は聖書研究上幾多の暗示を與ふるものである、初めイスラエルの民幾十萬モーセに率ゐられて埃及を出でし後久しくシナイ半島に流浪した、其間彼等は如何にして食物を得たる乎、朝毎に天よりマナを與へられたりと雖もそれのみではあるまい、即ち當時のシナイ半島は今日に比し更に沃饒の地であつたのであらう、然るに一朝裏海北氷洋間の土地隆起するや從來北氷洋より送られし濕潤の空氣は遮られてシナイ半島に達せず、遂に此所に沙漠を現出したるものと思はる、海北に土地隆起して海南の沃土忽ち沙漠と化したのである、然らば沙漠に再び川流れて番紅の花の如くに咲き輝かしむる事何の困難かあらん、神若し之を欲し給はゞ必ずしも特別の奇跡を行ふを要せず、唯だ裏海北氷洋間の土地を今一度び陷沒せしむれば即ち足る、然らばパレスチナ南方の沙漠は再び化して綠野となるであらう、アラビヤ然り、サハラ亦然り、サハラ沙漠利用策は學者爲政家の大問題である、而して其の或る部分は海面より低きが故に之を開鑿して海水を誘導し沙漠中に湖水を造れば可なりと做す者あるも事困難にして實行せられない、然しながら地の或る所は下り或る所は上る事あるは極めて多き事例である、地質學者の說明に由れば日本と朝鮮、又北海道とサガレン島とは嘗て連接し居たる事ありといふ、故にサハラの一部を陷沒せしめて沙漠に川を流れしむるが如きは神に取ては極めて容易の業である。

更に類似の一現象を求むれば濠洲大陸の成立が其れである、學者は曰ふ或る大なる隕石落下し來りて地球に衝突し半ば埋沒したるもの即ちかの濠洲大陸であると、而して地軸が軌道に對して廿三度半の傾斜を爲せるも亦此大隕石衝突の結果なりと說く、然らば地表に太陽熱を受くるの厚薄あり春夏秋冬の別あり沃野沙地

の差あり其他種々の變化を生ずるに至りし所以は一隕石の落下にありと見る事が出來る、知るべし神の世界を改造し給ふ方法の甚だ單純にして且容易なるを。

聖書が敎ふる所の事實を人の智慧に訴へて「斯くあるべし」「斯くあるべからず」と決するは笑ふべき迷誤である、人の壽長くして百歲を超えず人類の歷史的生命亦僅かに六千年に過ぎない、然るに夜々我等の眼に映ずる星の中には其光線の六千年を費して漸く此地球に到達するものありといふ、卽ちアダム、エバの時代の光を今日始めて我等が望みつゝあるのである、斯の如き短小の經驗を以て永遠の預言を批判せんとするが如きは恰も獨逸小話にある蜉蝣の決議と何の選ぶ所がない、或時蜉蝣中の學者間に會議が開かれた、而して一學者は立て曰うた「諸君或る古書に此池の水面氷結して周圍の綠草皆枯死する時ありと記せり」と、然るに滿場一致之を駁して曰く「迷妄々々」と、斯くて二時間以上の生命を有せざる蜉蝣等は一年間の事實を解する能はずして之を否決し去つたのである、聖書は實に神の言である、故に永遠より永遠に亘るの眞理を語る、如何にして之を淺薄なる人間の智慧と經驗とに訴へて否決し去る事が出來やう乎、聖書もし沙漠に花咲かんと言はゞ誠に爾かあるべしである、聖書若し宇宙萬物の改造を預言せば誠に爾かあるべしである。

聖書はキリストの再臨を以て俄然的出來事として示して居る、或は「ラッパ鳴らん時瞬く間に云々」といひ或は「盜人の來る如く」といひ、或は「電の東より西に輝く如く」といふ、然るに天然の進化は漸進的である、故に聖書の示す世の終末に於て我等に臨むと云ふ大變動は天然の理法に背くと言ふ者がある、果して然る乎、天然現象中にも俄然的變化多きに非ざる乎、諏訪湖の堅氷は一夜の中に融解するではない乎、石狩又は北見の野に春は蒼皇として來り昨日迄の積雪皆消えて忽ち福壽草は開き達摩草は笑ひ蝶は飛び蛇は動くではない乎、赤道直下を走る船舶の甲板上に立て日出を待つ時眞闇中突如として太陽の躍り出づるを見るでは

ない乎、或は又青年子女の所謂青春期に其心身俄然として一變するではない乎、生物學上に於ても近來の進化論は俄然的進化を認むるに至つた、ダーキンの説によれば何事も急變を許さず唯徐々として恰も河水が岩角を切り碎きつゝ遂に谿谷を造るが如くに進むのみである、然るに近頃和蘭のドヴリースの研究によれば徐々的變化の外に急變的進化ありて天然物を造出すには後者却て力ありといふ(mutation theory)、故にパウロがダマスコへの途上に於ける一日の經驗に由て忽ち回心したるが如き、或は余が四十年の信仰生活の後一朝にして再臨信者となりたるが如き少しも怪しむに足りない、新現象が突發する事は決して天然の理法に背かないのである、而して神は或時に至り急激的に全世界を改造し給ふのである。

世界の改造が天然的現象として見て不可思議ならざるのみならず、天然其ものが既に大なる預言である、今朝の如き美はしき朝は再臨の時を彷彿たらしめざるを得ない、かの富士山上の日出に際し甲信駿武一帶の山々が莊美なる旭光中に涵されたる絶景の如きは其儘に一の預言である、之に類する榮光の天然が遂に實現するのである、教友清水繁三郎君のメキシコより寄せたる最近の書信の一節に曰く

(君は勿論故國に起りし再臨運動を知らずして筆を執つたのである)

當地にて手近く繪ゑ候所のオバント山の獨立安固の容姿と其谷間を超えて繁る森に曉將さに到らんとする時の景色は面白く、谷間は白らみ山の裾と森の樹々は淡く濃く青く、涼氣身に泌みて爽かに義の太陽を迎えんと致して暗黑は去りて主は來り給ふ、斯く來り給ふかと思はしめ候

と、然り美はしき天然を見て主は斯く來り給ふかと思ふは信者自然の情である、而して主は實に斯く來り給ふのである、かゝる榮光の天然の中へ榮光の身體を以て我等は臨むのである、天然其物がキリスト再來の預言である、故に深き同情を以て天然を觀察したる者は自からキリストの再來を信じた、大詩人コレリッジの如き、カウパーの如き、ブラウニングの如きは其れである、詩人ゲーテは曰ふた

「我れ獨り天然の中に立つ時に彼女の解放を待焦るゝ收監中の囚人なるを知れり」と、而して基督再來は人類救拯の時であると同時に又天然解放の時である。

缺如する者あり―何乎！
初夏に葉綠滴り、
寫着に日光漲る、
―汚點何處にかある？
天地は光明に滿つ然れども空白なり、
聖像を迎ふる殿堂たるに過ぎず、
葉　何かある花綵何かある？
花冠ありて之を戴く者あるなし、
然り給へ來るべき者よ、
來　[redacted]不完全を完成し給へ、
碧空を充實し綠野を完美し給へ、
此の花園に生氣を吹入れ給へ、
然らば死せる萬物は
生命を受けて起き愛を以て榮えん、
然り愛を以て榮えん。

――ブラウニング――

基督再臨の證明者としてのユダヤ人

（一九一八年五月五日東京神田バプチスト中央會堂に於て）

基督再臨の如きは單純なる問題にして一回若くは二回の演說を以て之を說明し盡す事を得べしと想像したる者が尠くないであらう、然し乍ら余の此壇に立つ事前後八回にして嘗て一度も同じ事實を繰返さゞるに尙ほ語るべき事は無限である、既に之を直接に聖書に訴へ又或は社會の現狀に或は天然の進化に訴へて論ずる所ありしが今回は更に世界歷史の一面より窺ひて此問題を研究せんと欲するのである、若し機會あらば哲學の方面よりも之を論ずる事を得べく、殊に專ら聖書に據らん乎、其創世紀よりして數十回、其イザヤ書よりして一年間の講演を續くるに足り、エレミヤ記エゼキエル書ダニエル書ヨブ記等を以てせんには到底時足らず、かのエステル書又はルツ記等の如き人の意外とする所のものに就てずらも之

を再臨の光に照して多くの有益なる研究を爲す事が出來るのである、是に於てか余輩は反對者に提議せんと欲する、他なし反對者諸君果して何かの問題を提げ一月初旬より五月の終りに至る迄少しも興味を減ずる事なくして斯種の會合を續くる事が出來る乎、社會改良可なり國家救濟可なり若し其れが出來ると思はゞ乞ふ試みよ、加之再臨の光を有せざる人々の大缺點は聖書の盡きざる源より生命の水を掬む事を知らざるにある、彼等の聖書知識は極めて淺薄である、其の平常自ら讀み又は引用する所の聖句は甚だ狹き範圍に限られて居る、新約中にありても例へばテサロニケ前後書コロサイ書エペソ書又は羅馬書の九章乃至十一章馬太傳十三章廿四章廿五章及び默示錄の如きは封ぜられたる書なりとして殆ど之に觸れない、若し舊約に入らん乎、全體としては之が歷史的參考書たるの價値を認むるに過ぎずして其の我等の日常生活に如何程の關係あるかを知らない者が多いのである、見よ再臨を嘲る雜誌に聖書を傳ふる事幾許ぞ、一二の聖句を利用して實は自己の論を進むるのみ、而して其大部分は政治經濟小說又は小文學者の批評等に關する記事である、然し乍ら聖書を以て溢るゝ者にはかゝる餘裕はないのである、之れ狹きが故ではない、大問題に就て語るべき事餘りに多きが故である、再臨問題決して狹からず、是は維れ聖書の中心的眞理である、從て人生問題宇宙問題の中心的眞理である、再臨の光を以て往く所として知識の寶玉を發見せざるはない、此處にも彼處にもである、さながら春の野に出でゝ花を摘むが如く餘りに目樂しくして何れを擇ぶべきかを辨へざるが如くである。

余輩は茲にキリスト再臨の證明者としてユダヤ人を提出せんと欲する、之れ或人には甚だ新らしき題目であらう、ユダヤ人と言へばイエスを產み又之を十字架に釘けたる人種にして今は亡國の民である、彼等には過去ありて未來あるなしとは多くの人のユダヤ人觀である、ユダヤ人の將來と自己の信仰とに密接の關係ある事を知る者の如きは果して幾人あるであらう乎、然しながら再臨の信仰が我等に

供ふる問題中ユダヤ人の歴史ほど興味あるものは無いのである、之れ實に我等の救拯に最も深き關係ある問題である、而して此事に關する聖書の本文は極めて多しと雖も假りに其一二を擧ぐれば

其日エホバは高き所にて高き所の軍兵を征め地の諸の王を征め給はん、彼等は囚人が阱に集めらるゝ如く集められて獄中に閉ざされ多くの日を經て後刑せらるべし、かくて萬軍のエホバ、シオンの山及びエルサレムにて統べ始め且其の長老たちの前に榮光あるべければ月は面あからみ日は耻ぢて色變るべし（イザヤ書廿四章廿一節以下）

其日汝等イスラエルの子等よ、エホバは打ち落したる果を集むる如く大河の流よりエジプトの川に至る迄汝を一つ一つに集め給ふべし、其日大なるラッパ鳴りひゞきアッスリヤの地にさすらひたる者エジプトの地に追ひやられたる者來りてエルサレムの聖き山にてエホバを拜むべし（イザヤ書廿七章十二節以下）。

兄弟よ、我れ汝等が自己を智しとする事なからん爲に此奥義を知らざるを欲まず、即ち幾分のイスラエルの頑硬は異邦人の數盈つるに至らん時迄なり、而してイスラエルの人悉く救はるゝを得ん、錄して救者はシオンより出でゝヤコブの不虔を取除かん、又其罪を赦す時に我が彼等に立てん所の誓は此れなりとあるが如し（羅馬書十一章廿五―廿七節）。

卽ち知る聖書はイスラエルの決して亡ぶる事なく遂に神が嘗てアブラハムに賜ひたるパレスチナの地に復歸し再びエルサレムに都せん、而して救者其所に臨み親しく彼等を統べ治むるに至らんと預言するのである、イザヤが此語を發したるは紀元前凡そ七百年にして今より少くとも二千六百年前であつた、爾來今日に至る迄此語の預言する所は果して消滅したる乎若くは尙ほ實現しつゝある乎、若し前者ならんには聖書は價値なき書である、然しながら若し後者ならんには、卽ち預言者の古く預言したる大事實が今日我等の目前に儼然として存在するならばそは

驚くべき事であつて、聖書が大體に於て文字通りに歴史的事實として見らるべき事を敎ふるものである。

現在の獨逸皇帝の祖フレデリック大王と其侍醫チムメルマンとの間に行はれし面白き會話が世に傳へられて居る、大王はボルテールの弟子にしてルーテル敎會に屬すと雖も基督敎に冷淡なる人であつた、而してチムメルマンは恰も秀吉に於ける曾呂利新左衞門の如くに大王に仕へたが彼は善き基督信者であつた、或時大王チ翁に問うて曰く「汝今日迄に幾人を殺したる乎」と（後者は醫者なりしが故である）、答へて曰く「決して少數に非ず、然れども陛下には及ばず」と（大王は七年戰爭を戰ひしが故である）、或時大王又問うて曰く「汝が信ずる基督敎の證據何處にある乎」と、チ翁直に答へて曰く「陛下よ、ユダヤ人！ユダヤ人！」と、こは單にチ翁の頓智なりしのみならず確に深き眞理であつた、ユダヤ人は實に基督敎の證明である、彼等は弘く全世界に散布し何れの國と雖もユダヤ人を見ざる所はない、而して彼等が自己の生命よりも重しとする者は卽ち舊約聖書である、舊約の一言一句は彼等に依て恪守せられペンテコステ逾越節又は割禮等は今に至る迄悉く實行せらる、而して彼等の最大の希望は實にメシアの出現である、かゝる國民が前後四千年の間盛衰興亡の渦中に立ちて其堅固なる存在を失はず、アッシリアは滅びエジプトは倒れギリシャ羅馬は失せたるに拘らず獨りイスラエルのみは今尙ほ强健なる民族として繁榮し其數千二百萬、財權に知識に美術に世界の牛耳を握り最大勢力として存續しつゝあるのである、斯の如き事實は果して何事かを語らざる乎、目ある者は見るべし、若し他に奇跡なしとするも此の歴史上の一大事實こそは最も驚歎すべき大奇跡ではない乎。

ユダヤ人は其人口に比例して偉人を輩出したる事に於て世界第一等の人種である、何れの方面よりするもユダヤ人に遭遇せざるを得ない、哲學に於ては最大哲學者の一人たるスピノーザがある、彼は純粹のユダヤ人である、文學に於てはレ

ッシングの傑作『賢者ナタン』の主人公たるモーセス・メンデルゾーンあり、又有名なるハイネがある、ハイネは獨逸文學中最も人心の深所に觸れたるものにして彼を以て獨逸文學に對するユダヤ人の貢献は盡きたりと稱せられて居る、音樂に於てはメンデルゾンあり、又ワグネルと比肩すべきマイエルベールがある、後者の獨逸音樂界を風靡したる頃ワグネル出でゝ音樂界よりユダヤ人を驅逐せんと欲し國王の援助を得て大音樂堂を作り意氣揚々壇に上りし所其第一列に立ちてバイオリンを執りし二十人の悉くユダヤ人なるを發見し唯呆然たるの外なかつたといふ、其他新聞記者としては倫敦タイムスの巴里駐在通信員ブローギッツがある、彼は普佛戰爭當時の大功勞者であつた、又一時は大英帝國も其宰相としてユダヤ人を戴いた事があるのである、ビーコンスフイールド卿卽ち之れである、近頃迄獨逸の宰相たりしベートマン・ホルエッヒ氏もユダヤ人であるといふ、更に金融界に至てはロートシルトあり又シッフがある、シッフなかりせば我邦は露國と戰ふ事が出來なかつたのである（當時の日本公債の大部分に應募したる者は彼であつた、後我邦人中ユダヤ人の敵たる舊露國政府を謳歌する者あるを聞くや彼は怒て我邦より贈られし勳章を返納したとの事である）、有名なる慈善家ヒルシも亦ユダヤ人である、世に慈善家多しと雖も彼の如く吝みなく出捐した者はない。

ユダヤ人決して無爲の人種ではない、獨逸の新聞紙の多くは彼等の手中にある、露國の革命も實は彼等の手に由て行はれたとの事である、彼等の金力を以てせん乎、全パレスチナを購ふ事も困難ではない、彼等の智識を以てせん乎、新たに建設せられんとするエルサレム大學の何れの學科に就ても世界第一流の學者を網羅する事は容易である、强健なる國民は實にユダヤ人である、而して斯の如き國民が四千年の間幾多の迫害に耐へて今日迄存續し來りしのみならず、益々繁榮して世界最大の實力を掌握しつゝある其秘訣は何處に於て在るのである乎。

之が說明として或人は健康上の理由を擧ぐる、卽ち割禮は衛生上甚だ有益なりと

いふ、又ユダヤ人の豚肉を食せざるの風が彼等をして無病長壽ならしむるといふ、然しながら之をユダヤ人自身に聞けば理由は至て明白である、何ぞ、曰く舊約聖書の恪守である、殊にメシアに對する待望である、彼等は未來を待ち望んで生くるの民である、彼等は實に夢想家である、然しながら此熱烈にして遠大なる希望を懷けばこそ彼等は四千年の迫害と患難とに打勝ちて今日に至り驚くべき事業を成し遂げつゝあるのである、誰か待望の生活を以て無爲無能と做す者ぞ、人の生命を護り且强むる上に於て最も有力なるものは其の希望である、而してユダヤ人の歷史は之が爲に最適の實例である。

世に救主を待ち望んで其生存を續くる人種は二個ある、其一はユダヤ人であつて其二はクリスチャンである、少くともクリスチャンは爾かあるべきである、ユダヤ人はメシアを待ち望む、クリスチャンは一度び墓に降りし後復活昇天して再び來るべきキリストを待ち望むのである、然しながらキリストを措いて他にメシアあるなし、故に二者の望む所は畢竟同一である、クリスチャンとはメシア信者との意である（キリストはメシアの希臘譯なるに注意せよ）、メシアを待ち望まずしてクリスチャンと稱する事が出來ない、然るに自らクリスチャンと稱して却てキリストの再臨を嘲る者がある、彼等は言ふ「クリスチャンは善事を行へば足る、何ぞ徒らに待ち望みて硝子窓に凭りかゝり其鼻頭を扁平ならしむるを要せん」と（之れは米國に於ける或るメソヂスト教會の神學博士が其のテサロニケ前書の講義中に記したる文句であつて、再臨信者が窓際に佇立し天をのみ望みて活動を爲さざるを嘲るの言である）、再臨の希望は果して人をして不活動ならしむる乎、メシアを待ち望みて世界最大事業を成就げ又現に爲しつゝある千二百萬のユダヤ人は何を證明する乎、一千の銀を受け取り往きて貿易を爲さずして地に死藏したる僕は主の歸り來りし時「外の幽暗に逐ひやられ其處にて哀哭切齒」すべきではない乎、現に單純なる再臨の信仰を有する平信徒の顯著なる特徴は其事業心の勃興ではな

い乎、然り再臨の大希望を抱く者は其日より立ちて主イエスキリストの爲め大活動を爲さゞるを得ないのである、人をして正義の爲の活動家たらしむるものは實に再臨の信仰である、希望なき國民は亡び希望なき信者は衰ふ、而して眠れる信者と教會とを覺ます者にして基督再臨の信仰の如きはないのである。

選民の存續　イスラエルは未だ亡びない、亡びない而已ならず今猶强健の民である、彼は國土として寸地を有せずと雖も全世界に瀰漫して世界を家となしつゝある、彼の子孫は減退せずして增進しつゝある、何れの民族と雖も彼れイスラエルの如くに偉人傑物を產出したる者はない、而して此世が化してキリストの國と成る時はイスラエルが化してキリストの僕と成る時である、「イスラエルの人悉く救はるゝを得ん」とパウロが言ひし通りである（ロマ書十一章廿六）、神は選民にかゝはる其約束を忘れ給はない、選民の存續とキリストの再現との間に密接なる關係がある。

聖書の預言とパレスチナの恢復

（一九一八年五月十二日東京神田バプチスト中央會堂に於て）

されどイスラエルの山々よ、汝等は枝を生じ我が民イスラエルの爲めに實を結ばん、此事遠からず成らん、見よ我れ汝等に臨み汝等を眷みん、汝等耕されて種を蒔かるべし、我れ汝等の上に人を殖さん、是れ皆悉くイスラエルの家の者なるべし、邑々には人住み墟址は建て直さるべし、我れ汝等の上に人と牲畜を殖さん、是等は殖えて多く子を生まん、我れ汝等の上に昔時の如くに人を住ましめ汝等の初の時よりも勝れる恩惠を汝等に施すべし、汝等は我がエホバなるを知るに至らん、我れわが民イスラエルの人を汝等の上に歩ましめん、彼等汝を有つべし、汝は彼等の產業となり重ねて彼等に子なからしむる事あらじ（エゼキエル書卅六章八―十二節）。

萬軍のエホバかく言ひ給ふ、荒れて人もなく畜もなき此の處と其凡ての邑々に再び牧者のその群を伏さしむる牧場あるに至らん、山の邑と平地の邑と南の方の邑とベニヤミンの地とエルサレムの四周とユダの邑に於て群再びその之を數ふる者の手の下を通らんとエホバ言ひ給ふ（エレミヤ記冊三章十二、十三節）。

然れども今は我れ此民の遺餘者に對する事先の日の如くならずと萬軍のエホバ言ひ給ふ、卽ち平安の種子あるべし、葡萄の樹は果を結び地は產物を出し天は露を與へん、我れ此民の遺餘者に之を盡く獲さすべし、ユダの家及びイスラエルの家よ、汝等が國々の中に呪ひとなりし如く此度は我れ汝等を救うて祝言とならしめん、懼るゝ勿れ、汝等の腕を强くせよ（ゼカリヤ書八章十一―十三節）。

ユダヤ人の歷史は大なる奇跡である、其の今日迄幾多の迫害に耐へて四千年間の存在を續けし事が大なる奇跡である、其の聖書の預言に適ひてパレスチナの地を恢復しつゝある事が又大なる奇跡である、而して注意すべきはユダヤ人に關する此等の奇跡が今日我等の信仰に取て極めて深き關係を有する事である。

神は人をして大なる奇跡を信ぜしめんと欲する時屢々之に類する他の奇跡を實現して以て人の信仰を容易ならしめ給ふ、處女マリア奇跡により聖なる子を生まざるべからざるを知るや其往いて訪れたるはエリサベツの許であつた、之れ後者の齡既に老い石女と言はれたるに拘らず亦マリアと均しく子を生まんとして居つたからである、エリサベツに其事あるを見てマリアは天使ガブリエルの己に告げし言を信ずる事が出來たのである、變貌の山の出來事の如きも亦其一例である、ヘルモン山上モーセとエリア顯はれてキリストと語る、何の爲めぞ、他なし、目擊したる弟子等をしてキリストの復活を信ぜしめんが爲めの豫備的奇跡であつたのである。

基督者は絕大無比の希望を賦與せられて居る、卽ちキリスト榮光の體を以て再來し給ひ信者は復活せしめられ世界萬物は改造せられ彼等信者の手に委ねられんと

すとの事である、之れ聖書の明かに預言する所である、然しながら事餘りに遠大にして容易に之を信ずる事が出來ない、玆に於て神は之に類する他の預言を成就して以て基督者の希望を確實ならしめんと欲し給ふのである、パレスチナの恢復に關する聖書の預言と其成就とは卽ち是れである、依て知るユダヤ人の歴史は實に我等各自の救拯と直接の關係を有する事を。

パレスチナは嘗てユダヤ人の始祖アブラハムに與へられし地であつた、然しながら彼等は幾度びか其國を逐はれてパレスチナは常に異邦人の蹂躙する所となつた、アッシリア、バビロン、羅馬等の諸國相尋いで之を占領し遂に土耳古帝國の手に歸して現時に至つた、而してユダヤ人が最後に其故國を去りてより既に千八百年である、彼等は今や全世界に散亂して數多の國籍に屬し自己の領土としては寸地をも有せず、舊都エルサレムの如きは全く昔日の面影を止めない、然るに聖書は明白に預言して曰ふ「ユダヤ人は再び故國に歸りてパレスチナの地を恢復せん」と、之れ果して有り得べき事である乎、斯の如きは殆ど人の想像する能はざる至難事である、英語に所謂next to impossible（殆ど不可能）とは此事である。

是に於てかユダヤ人間に自ら二派を生ずるに至つた、一派の者はパレスチナの恢復に關する聖書の明白なる預言あるに拘らず之を精神的の意味に解釋して土地の問題の如きは顧みない、之に對し他の一派は確く神の約束を信じ聖書の預言を文字通りに解釋して只管其實現を待ち望みつゝある、二者の關係は恰も再臨に關する基督者の狀態と酷似して居る、聖書を其儘に信受せんとする者と之を靈的に解釋し去らんとする者、基督者の中に此二派がある、ユダヤ人の間にも亦此二派がある、而して聖書の預言を其儘に信ずる者の信仰が多くの困難に遭遇するも決して衰へずして愈々堅固を加へつゝあるは實に著るしき事實である。

今日までキリスト再來の日の近きを信じて恥辱を招きし者が尠くないといふ、ユダヤ人にも同じ經驗があつた、パレスチナを彼等に恢復すべきメシアとして出現

したる者前後七人を數ふる事が出來る、其最も古きは紀元一一七年乃至一三八年に出でたるバールコクバであつた、事は勿論失敗に終つた、次で其れより凡そ三百年の後にクリート島のモーセなる者が現はれた、次は八世紀の頃に起りしシリア生れのセレーネであつた、次は彼れより三十年後に現はれしペルシアのヲバヂヤであつた、次は一〇六〇年のダビデ・アルロイ、また一五三〇年のダビデ・ルーベンであつた、近來最も著名なりしは一六六六年に現はれたるスミルナ産のサバタイであつた、此時全世界のユダヤ人彼に迷はされ其或る者の如きは自から進んでパレスチナに歸來した、然しながら之も亦遂に失敗に終つた、是に於てか反對派は嘲りて曰ふのである、「最早や迷妄を信ずる事勿れ、ユダヤ人の使命は靈的に萬民を指導するにあり」と。

然しながら斯くも屢々苦き經驗を重ねたるに拘らず多くのユダヤ人は依然として最後のパレスチナ恢復を信じて疑はない、のである、彼等が逾越節の夜全世界にありて一齊に祈る祈禱文の一節に曰く「主よ、我等今夕此處に在りて逾越節を守る、願くは明年之をエルサレムに於て守るを得ん事を」と、彼等は實に四千年の久しき間斯く祈り續けて來たのである、たとへ幾度び失敗を重ぬるとも此希望は決して之を動かさないのである。

而してユダヤ人問題の解決は常に歐洲政治家の心を惱ましたるものであつた、殊に再臨の信仰の復興するや必ずユダヤ人をパレスチナに復歸せしめんとするの運動が行はれた、其一例は有名なるオリバー・クロムエルである、彼は確かに英人中第一位を占むる人物にして彼なくしては今日の英國も米國もなかつたのである、而して彼れクロムエルは最も熱烈なる再臨信者であつた、故に其の政權を握ると同時に着手したるはユダヤ人の復歸運動であつた、之が爲に彼は或はダビデの血統を引けるユダヤ人に非ずやとの疑を抱く者さへあるに至り或る外國に流浪せるラビ（猶太教の教師）の如きは自ら英國に渡りて彼れクロムエルの系圖を調

査したとの事である、然し彼は勿論普通のジョン・ブル（英國人）であつた、彼をして此擧あらしめたる所以のものは其の再臨の信仰より出でたるユダヤ人に對する深き同情に外ならなかつたのである。

ユダヤ人の復歸運動として最後に現はれたるものが一八九六年に起りし所謂シオン運動（Zionist Movement）である、此運動を始めたるテオドル・ヘルツルは墺國の新聞記者にして早く猶太教を棄て劇作家として巴里に流浪して居つた、然るに當時佛國に於てユダヤ人に大なる迫害を加へし所謂「ドライフス事件」なるもの起るやヘルツルは憤慨措く能はず、之に刺戟せられて再び猶太的信仰を回復し、預言者の言の如くにユダヤ人をパレスチナの地に復歸せしめ、其王國を實現せんと欲し、"Der Judenstaat"（ユダヤ國論）を著はして其主張を發表した、是に於て多くのユダヤ人等は國家恢復の唯一の希望此處にありとして大に贊同の意を表し忽ち其の計畫がシオン運動となりて現はれたのである、此の運動に對しては內外に於て強き反對が行はれた、然しながらヘルツルは其の四十五年の生涯を此れが爲に獻げ、具さに辛酸を嘗め遂に身は熱心の故に燒き盡されて早折するに至つた、其の慘憺たる苦心の下に存せし深き愛國的確信は誠に尊敬に値するのである。

翻てシオン運動の實況を窺ふ時は驚くべきものがある、初め資本金二千萬圓を投じて猶太植民協會を設立した、（此運動とは直接の關係なきもヒルシ男爵出資の下に七千萬圓を以て組織されシナイとパレスチナとに植民するの目的を以て成立する國民的財團がある）、而して十萬人のユダヤ人を募集して彼地に送つた、ユダヤ人は多く小賣商又は仲買商に從事し農民としては既に全く實力を失へる者であるかゝる民の多數を以て植民を企つるが如きは殆ど無謀の擧なりとの非難もあつた、然るに其結果は著るしきものである、爾來今日迄二十一年間に道路は改築新築によりて面目を一新し、池沼の衞生狀態はユーカリプタス樹の栽植に由て革新せ

られた（土着のアラビヤ人等は此樹を「ユダヤ人の樹」と稱して驚嘆せりといふ）、土地の沃饒は人造肥料に由て復活し、加ふるに瓦斯及び石油機關のポンプを以てする灌漑に由てレモン及び蜜柑の栽培上殆ど奇跡に類する改善を見た、又近來發見せられたる方法により黴菌の注射に由て鼠族を驅除したれば麥、大麥、果樹の收穫を激增した、從來一エークルの產出三百五十函の割合なりし蜜柑は七百五十函に上り從て地價も亦騰貴して前には一エークル六十圓なりし土地今は一躍三百六十圓に上つたといふ、其他馬鈴薯、胡麻、麥、葡萄、シャボテン等に就ても顯著なる結果を擧げて居る、以上は主として近着のヒッバート雜誌上に於けるラムバ氏の報告に依るものであるが之に由て見るも聖書に預言せられたるパレスチナの恢復は着々實現しつゝあるものと見なければならない。

更にパレスチナは其地勢上將來世界の大富源たるべき要件を備へて居るのである、卽ち其の死海（其水は二十五パーセント以上の鹽分を含む）よりはやがて全世界の鹽とボタースとを供給し得べく其のヨルダン河畔は水力電氣の利用に由て世界第一の綿花栽培地たるに適し其のヨルダン以東の地は燐酸の大產地である、又死海は地中海より低き事二百尺ガリラヤ湖よりは六百尺の低地に位するを以て之を南方に掘鑿して海水を入るれば大船を浮べるに足るであらう、斯の如きの地に再びユダヤ人を入れて繁榮の民たらしむる事は決して困難なりと言ふ事が出來ない。

然りパレスチナの天と地とは再びユダヤ人を迎ふるに足る、然しながら最後に一の大問題の遺るものがある、何ぞや、曰く人である、土耳古人である、彼等は頑として此地をユダヤ人に讓らない、ヘルツルに取ての致命傷も亦此難問題であつた、一九〇六年刊行の大英百科辭典にシオン運動を論じて曰く「此運動は到底成功するの見込なし、何となれば土耳古人を如何ともする能はざれば也」と、而して今より十二年前に於ける記者の此言は當時に在ては有力なる議論であつた、然る

に見よ、昨年十二月エルサレムは遂に土耳古政府の羈絆を脱して英軍の手に歸したのである、而して其翌日英國外務大臣は議會に臨んで宣言して曰く「吾人はやがて之をユダヤ人に返還せんと欲す」と、斯くて憾みを呑んで逝きしヘルツルの望みは達せられんとするのである、惜むらくは彼れヘルツルをして此言を聽かしめざりし事、今や大英百科辭典の記事正に顏色なしである。

聖書はパレスチナの恢復を預言する、而してユダヤ人は之を信じてひたすらに祈り且待ち望んだ、失敗は失敗に尋いで彼等に臨んだ、然しながら彼等は唯聖書の預言に賴りて其望みを動かさなかつた、而して舊き預言は遂に成就せんとしつゝある、ユダヤ人は聖書の言の如くにパレスチナを恢復せんとしつゝある。

パレスチナ恢復に關して然りとせば再臨に關しても亦然らざらんやである、再臨の希望も亦幾度か失敗の經驗を嘗めた、然し乍ら聖書の預言は明白である、我等も亦ユダヤ人の如く唯聖書のみに賴る、而してパレスチナ恢復の時の近づきしを知つて一層再臨の信仰を堅くせざるを得ない、神は基督者に對しても亦ユダヤ人に對するが如く其約束を忘れ給はないのである。

三條の繩　聖書は歷史であり、實驗であり、預言である、即ち傳道之書第四章第十二節に言へるが如く三條の繩である、故に容易く斷ることが出來ない、聖書は過去に根さし、現在に働らき、未來を望む、永遠の書なる聖書は昔あり、今あり、後あらん者である、所謂高等批評は聖書を主として歷史的に研究するが故に其靈的意義を見遁し易く、其預言的指示に注意しない、其反對に聖書を靈的にのみ解釋して其歷史と預言とを顧みざる者は樓閣を雲上に築くの危險に居る者である、而して又聖書の預言にのみ熱中して歷史と實驗とを輕んずる者は常識の軌道を脱して迷信に陷いり易くある、神の書なる聖書を學ぶに方て愼むべきは觀察の一方にのみ偏せざらん事である、永遠の磐なる聖書は歷史、實驗、預言の鼎足の上に立つ者である。

再臨信者の祈禱として見たる主の祈禱

馬太傳六章九―十三節の研究

（一九一八年五月十九日大阪天滿基督教會に於ける講演の一部）

○主の祈禱は基督信者の祈禱の模範であつて彼が毎日繰返す所の者である、而して何ぞ知らんや是れ基督再臨信者の祈禱と見て其意味の最も明白になる事を。

○天に在す我等の父よ、天とは後にいふが如く地に對して云ふのである、天とは靈界を指して云ふのではない、聖旨は必しも靈界に於て行はれない、天とは神の聖旨の完全に成る所であつて或る場所を指して云ふのである、其何處である乎を知らない、只此地でない事丈けは明かである○「父よ」と云ひて「神よ」と云はない、又「我等の父よ」と云ふ、キリストの父であつて又信者の父である、彼は言ひ給ふた「我は我が父卽ち汝等の父に昇る」と（約二十の一七）、我等の父の家は天に在るのである。

○願くは爾名を尊崇めさせ給へ　爾名を聖めさせ給へ、聖き者として尊ませ給へ、權威ある者として崇めさせ給へ、此祈禱は後に「爾旨の天に成る如く云々」とある如く「天に於けるが如く地に於ても」の句を附して爲すべきである、卽ち「願くは天に於けるが如く地に於ても爾名を尊崇めさせ給へ」と、神の聖名は天に於ては尊崇めらる、然れども地に於ては尊崇められない、地に於てはイエスキリストの父の聖名は今や輕んぜられ、嘲けられ、辱しめらる、是れ彼の威權が地に於て行はれざる最も明白なる證據である、地は今や其主人たる神に叛きて其名を辱しめつゝあるのである、而して全地が其正當の君たる神を君として崇むるに至らんことをと祈る、而して是れ「彼が鐵の杖を以て列國を牧どり給ふ」時であるは我等の知る所である（默十二の一五）、聖名の尊崇は神の威權に係はる大問題である、愛の普及と稱するが如き道德問題とは其性質を異にする、「王其國に臨りて其名の民の間

に尊崇められんことを」と云ふが如き祈禱である。

○爾國を臨らせ給へ　「國」とは希臘語の basileia 即ち王國である、而して王國は王（basileus）ありて始めて成立する者である、故に「爾國を臨らせ給へ」は「國王を送り給へ」又は「王よ臨り給へ」と云ふと同じである、而して是れ基督信者の口を以て唱へらるゝ時に基督再臨の祈禱たるは何人が見ても明かである、殊に「臨り」と云ふは俄然的來臨の意である、即ち舊約馬拉基書三章一節に謂ふ所の「汝等の求むる所の主、即ち汝等の悅樂ぶ契約の使者忽然其殿に臨らん」とある其事である、「臨る」と云ふ言辭の中に「忽然」と云ふ意味が含まれてある、「爾國を臨らせ給へ」と云ふは現代人が思ふが如く「人類全體が敎會の指導の下に徐々として基督信者と成らんことを」と云ふが如き事ではない、キリストは人の知らざる時に忽然と臨り給ひて其國を建設し給ふとは聖書全體の明かに敎ふる所である。

○爾旨の天に成る如く地にも成らせ給へ　原語を直譯すれば「爾旨をして成らせ給へ天に於けるが如くに地に於ても」となる、此祈禱の中に特に注意すべきは「成らせ給へ」と云ふ言辭である、是れ文法に所謂命令法である、「命じて爾旨をして成らしめ給へ」と意譯して差支ない者である、而して是れ王の來臨に因り權威宣揚の結果として實現する事たるは明かである、即ち王の名の崇められん爲に彼れ臨り給ひて其命令の行はれん事をとの祈禱である、何處までも王の來臨を乞ふの祈禱である、聖靈の內在に加ふるに大王の天地萬物の上に來臨し給ひて之を一變して義の王國を建設し給はんことを求むるの祈禱である、以賽亞書二章十節以下廿二節まで等と對照して解すべき祈禱である。

○以上は神に係はる祈禱である、以下は信者に係はる祈禱である、神に係はる者三つ、人（信者）に係はる者三つ、而して之に最後の頌讚の辭一句を加へて七つ即ち完全の祈禱となるのである。

○我等の日用の糧を今日も與へ給へ　此祈禱を文字の儘に解して其意は甚だ解し

難くある、主は他の所に於て（而かも直ぐ後に）「生命の爲に何を食ひ何を飲まんとて思ひ煩ふ勿れ」と敎へ給ふた、然るに此所には日用の糧を我等に與へ給へと祈るべしと敎へ給ふと云ふ、其間に確に矛盾がある、勿論糧の爲に祈るは惡しき事ではないとして信者が自己の爲に祈るべく敎へられし三ヶ條の中に其一ヶ條が肉體の糧の爲であるとは甚だ受取り難き事である、之は何か他の意味がなくてはならない、之れ基督信者に取り應はしい祈禱でなくてはならない、而して再臨信者の祈禱として見て其意味が明瞭になるのであると思ふ。

○此祈禱の中に難解の辭が一つある、それは「日用」と譯せられし希臘語のepiousion（ウーシオン）である、是れ何を意味する辭なるや言語學者と雖も今に至るも解らないのである、之を「日用」又は「日毎」と譯せしは拉典譯聖書に由るのであつて原語の確實なる意味ではない、或は「明日」の意なりと云ひ、或は「上より降る」の意なりと云ふ、其の孰れが眞正しきや判定することが出來ない、信者が日毎に複誦しつゝある祈禱文の中にも斯かる難解の辭あるを知つて聖書研究の容易ならぬ事であることが判明る、然し乍ら此辭を別として祈禱全體の意味は解するに難くない、「糧」は確かに肉體を養ふための糧である、之を或人の云ふ如くに「上より降る靈のマナ」と解すべきでない、又「今日」といふ辭も其意味は明白である、故に祈禱の意味は「今日といふ今日此肉體を養ふための糧を我等に與へ給へ」と云ふことである、而して信者は何故に斯かる祈禱を毎日繰返さなくてはならないか、彼は明日を知らざる今日限りの者であるからである、主は何時來り給ふ乎判明ない、今日か今日かと彼の來臨は待たるゝのである、斯かる心の狀態に於て在る者は明日又は明年に對し肉の準備を爲すの必要はないのである、信者は「今日と云ふ今日に必要なる肉の糧を與へ給へ」と祈りて日に日に主を俟望むのである、糧の要求ではない、慾の制限の要求である、「明日の事を思ひ煩ふ勿れ、明日は明日の事を思ひ煩へ、一日の苦勞は一日にて足れり」とある主の敎訓の實行の要求

である、天空の鳥を養ひ給ふ天の父が其子を養ひ給ふは必然である、糧の與へられん爲に父に祈るの必要はない、唯我等の糧の要求の今日以上に渉らざらんこと、是れ信者の特に祈るべき事である、此祈禱の意味を解せんと欲せば須らく路加傳第二十一章第三十四節に記せるイエスが其の弟子等に與へ給ひし警誡の辭を參照すべきである、曰く「汝等自から心せよ、恐らくは飲食に耽り、世の煩勞にまとはれて心鈍り、思ひがけなき時に、かの日（基督再臨の日）羂の如く來らん」と而して此事あらんことを知るが故に信者は日々祈るべきである「願くは今日、今日丈けの糧を我等に與へ給へ」と、信者の陷り易き危險は糧の與へられざらんことではない、明日又は明年又は子孫の事を思ひ煩ひて、世の煩勞にまとはれて主再臨の日に於ける救拯の好機を逸せん事である。

○我等に負債ある者を我等が免す如く我等の負債をも免し給へ　是れ如何なる場合に在るも信者の爲すべき祈禱である、然し乍ら前後の關係より見て是れ特に終末の審判に備ふるための祈禱であることが判明る、其直ぐ後に「天に在す汝等の父も汝等の罪を免し給はん」、「免し給はざるべし」とありて孰れも未來動詞である、今免すは後免されん爲である、今免さずば後に天使等の集議に干らん、地獄の火に干るべし（五章廿二）、今兄弟と和らがずば、後「訴ふる者汝を審官に附し、審官また汝を下吏に附し、遂に汝は獄に入れられん」（五章廿五）、實際に人の罪を赦すの動機にして主再臨の希望の如く强き者はない、今日までに幾多の怨恨は此希望の起りしが故に取除かれたのである、今日の基督教會内に多くの不和怨恨の蟠まりて解けざるは其内に此希望がないからである、論より證據、基督再臨を靈的にのみ解釋し、其具體的實現を嘲ける者に敵を赦すの心乏しく、仇恨、爭鬪、妬忘、分爭は彼等の間に絶えないのである。

○我等を試誘に遇せず惡より拯出し給へ　是れ甚だ解し難い祈禱である、試誘は惡い事ではない、之に由て信者の信仰は益々堅められ且つ高められるゝのである、

雅各書一章二節以下に言へるが如し、曰く「我が兄弟よ若し汝等各様の試誘に遇はゞ之を喜ぶべき事とすべし、そは汝等の受る信仰の試みは汝等をして忍耐を生ぜしむるを知れば也云々」と、又曰く「忍びて試誘を受くる者は福なり、蓋試誘を善しとせらるゝ時は生命の冕を受くべければ也」と(同十二節)、然るに主は玆に「我等を試誘に遇はし給ふ勿れ」と祈るべしと敎へ給ふ、是れと彼れとの間に大なる矛盾が無くてはならない、而して其明白なる解釋は本誌前號に於て中田重治氏が『主再臨の光をもて見たる聖句』の中に示されし通りである、信者に遇ふべき試誘がある、而して又遇ふべからざる試誘がある、而して遇ふべからざる試誘は基督再臨の時に不信の世に臨まんとする試誘である、默示錄三章十節に言へる「地に住む人を試みんが爲に全世界に臨まんとする試煉」である、此試誘を遁るべき事に就てはイエス御自身が弟子等に告げて敎へ給ふた、曰く「汝等警醒みて此臨まんとする凡の事を避れ又人の子の前に立ち得るやう常に祈れ」と(路廿一の卅六)、而して「我等を試誘に遇せずとの祈りは此祈りに他ならないのである、如斯くにして再臨信者の祈禱としては此祈禱に深き意味がある、然れども再臨を信ぜざる者に取りては主の敎へ給ひし此祈禱は解するに甚だ困難い者である。○「惡より拯出し給へ」とある「惡」とは惡者であつて惡魔である、終末の日に於て惡魔の誘惑の一層激烈になるが故に爾か祈るの必要があるのである。

○國と權と榮は窮りなく爾の有なれば也　國は神の國であつて基督の再臨に由て地上に建設せらるゝ者、權は國を建立し又維持するの力、榮は萬物を己れに服はせ得る權を揮ひ給ふの結果として聖國に顯はるゝ榮光である、是れ皆父の有であると云ふ、父ならでは爲す能はず又有せざる者であるとの意である、父のみ國を建つるの能を有し給ふ、故に此父に對ひて「爾國を臨らせ給へ」と祈る、父のみ國を此國を治むるの權を有し給ふ、故に此父に對ひて「爾旨の天に成る如く地にも成らせ給へ」と祈る、父にのみ窮りなき榮光存して彼のみ能く我等をして其子の榮

光の狀に象らしめ給ふ、故に此父に對ひて我等を聖め給へ、惡者より拯出して聖國の民たるの榮光に與らしめ給へと祈るのである、國と云ひ權と云ひ榮と云ひ皆政治的の言辭である、人の子が再び天より降り來りて地上に建設し給ふ義の王國に適用するにあらざれば意味を成さゞる言辭である。

○如斯くにして主の祈禱は再臨信者の祈禱として見て意味最も明瞭なる者である、單に之を靈的に解釋せんとして其或る部分は意味を作ず、或る他の部分は意義甚だ微弱なる者となる、天國は近つけり、我等頂を伸して之を俟望んで此祈禱は自づから我等の心より湧出るのである、主は勿論今時と雖も我等と偕に在し給ふ、然れども彼が再び顯はれ給ふ時に我等の歡樂は充たされ、其時外なる萬物は內なる靈に和して信者の希望は完成うせらるゝのである。

*『聖書之研究』第二百十四號

イエスの變貌

馬太傳十七章一―八節の研究

（一九一八年六月二日東京神田バプチスト中央會堂に於て）

聖書は如何なる書なる乎を說かんと欲せば必ずや聖書を以てしなければならない、聖書を閉ぢて聖書を語らんとするは無益の勞力を費すものである、ルーテル曰く「聖書の終る所は基督敎の終る所である」と、然るに多くの基督者の中には聖書を重んぜずして「聖書には爾かあらんも我は之を信ずる能はず」と言ふ者がある、然らば實に此人を如何ともする能はずである、基督者の信仰又は實驗は聖書を離れて之を語る事が出來ない、聖書を如何程迄重んずる乎に依て基督者の態度は自ら定まるのである、再臨を信ずるといひ又信ぜずといふ、然しながら事は單に再臨問題ではない、聖書問題である、再臨問題は今や進んで聖書問題に移つ

たのである、汝の聖書觀を示せよ、然らば汝の信仰は明白ならん、聖書を如何に解釋する乎、イエスの變貌又はラザロの復活等の記事を如何に解釋する乎、之を客觀的の事實と見る乎はた主觀的の解釋を施さんと欲する乎。

イエスの變貌及び之に關する凡ての出來事は今日我等の實驗に於て見る事を得ざる現象である、或る高き山の上にてイエスの狀變り顏は日の如く輝き衣は光の如く白くなれりと云ひ、モーセとエリヤ現はれてイエスと語れりといひ、雲より聲ありて「之は我が愛しむ子わが悅ぶ者なり、汝等之に聽け」と曰へりといふ、是れ皆近代人の信ずる能はざる事實である、故に近代の聖書學者は種々なる解釋を試みて之を說明し去らんと力むるのである、英國の聖書學者にして世界的名聲を有するW・H・ベンネット氏の馬可傳に關する論文中に示せる說明の如きは其代表的なるものである、曰く「高き山」とはシナイ山ならん、何となれば此れイエスの將にエルサレムに赴きて非常なる苦痛を經んとする時なれば、彼は故らに歷史的聯想の伴へるシナイ山迄弟子等を伴ひて旅行したるならん、而して時は多分夜なりしならん、イエスはゲッセマネの園に於ける如く一人進み出でゝ祈りしならん、かくて熱き祈を獻げつゝある時忽ち月光雲より漏れしか又は電光閃めきてイエスを照し其顏と衣とを純白に映出したるならん、モーセとエリヤ現はれたりとはイエス大聲にて祈れる間にモーセ及びエリヤに就て語りし其聲を弟子等が聞きたるに由るならん、若し弟子等此二人の形を見たりとせば恐らくイエスは其夜弟子等の知らざる何人かと會見の約束ありて山上にて彼等と語りしに由るならん、何にせよ弟子等は豫てイエスを恐るゝ事甚だしく平常彼が祈禱の場に近づく事を許されざりしも當夜は彼の側にありて其の血を流すが如き熱烈なる祈禱を聽き恐怖の餘り戰々兢々たりしが爲め聖書に傳ふるが如き印象を受けたるならん」と、是れ有名なるベンネット氏の變貌に關する解釋である（ゼ・エキスポジトル雜誌第十卷二二〇頁以下を見よ）。

若しイエスの變貌にして斯の如きものならん乎、そは我等の靈の爲に果して何等

の教訓を與ふるのである乎、加之此解釋の基づく所は一として假說ならざるはない、高き山はシナイ山ならんといひ弟子等は恐怖の餘り神經過敏なりしならんといひ、イエスは祈の中にモーセとエリヤの名を呼び給ひしならんといひ、殊に弟子等の知らざる或人と會見したりしならんといふが如き之を常識ある平信徒に訴へて其の全く價値なき頭腦の產物たるは明白である、斯る迂遠にして且根據なき說明は到底人心の生きたる要求に應ずる事が出來ない、我等の貴き靈は之を幾多の假說を以て築き上げたる信仰の上に託する事が出來ないのである、斯の如き曲折したる解釋を施さんよりは寧ろ是等の記事を全然葬り去るに如かずである。

何故に「ならん、ならん」と言ひて空しき假說を重ぬるのである乎、何故に記事其儘を信じないのである乎、聖書は本來其儘に信ずるやうに書かれしものである、之を頭腦を以て了解せんと欲するが故に多くの假說を要するのである、頭腦を以てせず心臟を以てせよ、知識を以てせず信仰を以てせよ、然らば何の假說をも要せずして聖書の記事其の儘を信ずる事が出來るのである、而して其記事より大なる教訓を獲るのみならず是に由て聖書の他の部分も亦明白にせられ依て以て信仰を强められ希望を確かめられて我等の實際生活を一變するに至るのである、聖書を神の言として其儘に信じて初めて之を靈の糧とする事が出來る、是れ卽ち我等の立場である。

然らば變貌の記事が教ふる所の眞理は何である乎、先づ第一に變貌はイエスの復活卽ち其身體の榮光的變化の前表である、而して又我等凡ての信者に及ぶべき最後の救拯の實例である、我等も亦何時かは變貌のイエスの如くに榮光化せしめらるゝのである、故に變貌を信じて復活を信ずる事は一層容易となるのである。

今假りに卑近なる一例を取らん乎、蠶兒既に地の上を匍ふの時過ぎて新らしき生活狀態に入らんとする時卽ち其上簇の時期に於て試みに其體を觀察すれば汚物悉く除去せられて全身透明なる黃金色を呈し榮光化せるを見るのである、イエスの

身體も亦斯の如く次第に榮光化して遂に昇天すべきであつた、何となれば彼の生涯には絶えて罪なかりしが故である、人は始めより死せざるべからざる者ではない、死は罪の結果である、人若し全く罪を犯さゞりしならんには彼は死の苦き經驗を通過せずして自然に復活の狀態に移るべかりし筈であつた、然し乍ら凡ての人罪を犯したるが故に死は人類の運命となつたのである、唯イエスのみは罪を犯さなかつた、故に彼のみは我等と共に死するの要なく其身體は自然に榮光化すべきであつた、而して變貌は實にこの榮光化の發端である、彼の自然的昇天の近づきし徵候である、「かくて彼等の前にて其狀變り其顏は日の如く輝き其衣は光の如く白くなりぬ」とある、然り、之れ罪なき身體に臨むべき當然の狀態であつた、我等は茲に何の假說を設くる事なくして其儘之を信ずる事が出來るのである。

然らばイエスは何故に此時昇天し給はざりし乎、路加傳九章卅一節の傳ふる所によればモーセとエリヤ現はれてイエスと語りしは「彼のエルサレムにて世を逝らんとする事」に就てゞあつたといふ、「世を逝らん」とは原語にてexodus（エキソダス）卽ち「通り拔ける事」である、希臘語の前置詞のek（エク）はapo（アポー）と異なり後者は或者を避くるの意あるに反し前者は其中を貫通して過ぎ行くの意を有する、イエスはモーセ及びエリヤと共に己がexodusに就て語り給へりといふ、卽ち彼は本來死を避けて自然に昇天すべかりし筈なるに却てエルサレムに於ける最も苦き死を貫通して行かんとする事に就き語り給うたのである、イエスに取て死は避け難き事ではなかつた、彼は變貌の山より其儘昇天し得たのである、然れど彼は我等と最も深き同情的關係に入らんが爲め殊更に死を通過するの途を選び給うたのである、是れ我等に取て無上の慰藉である、イエスキリスト我等の爲に死せりといひて單に三十年五十年の生命を棄て給うたのではない、死を通過せずして濟むべき御自身を強ゐて死の中に投じ給うたのである、イエスの犧牲の深き意味は全く此處にあるのである。

然し乍ら其のみではない、變貌の出來事よりして我等は更に福なる光を獲る事が

出來る、變貌山上の光景はキリスト再臨の時に於ける信者の狀態のtableau（活人畫）である、パウロ曰く、「見よ、我れ汝等に奥義を告げん、我等は悉く眠るにはあらず、終のラッパの鳴らん時みな忽ち瞬く間に化せん、ラッパ鳴りて死人は朽ちぬ者に甦り我等は化するなり云々」と（コリント前書十五章五十一五十二節）、又曰く「我等主の言をもて汝等に言はん、我等の中主の來り給ふ時に至る迄生きて存れる者は既に眠れる者に決して先だゝじ、それ主は號令と御使の長の聲と神のラッパと共に自ら天より降り給はん、其時キリストにある死人先づ甦り後に生きて存れる我等は彼等と共に雲の中に取り去られ空中にて主を迎へ斯ていつ迄も主と偕に居るべし云々」と（テサロニケ前書四章十五節以下）、主再び來りて信者を迎へ給ふ時既に眠れる者は復活せしめられ現に生くる者は其儘化せられて彼と共に相見る事が出來るのである、而して變貌のイエスを中心にモーセとエリヤ現はれて榮光の團欒を爲したるは卽ち其時の模範であつた、モーセは一度び死せしものである、故に彼は既に眠りし信者にして再臨の日に復活せしめらるべきものを代表するのである、エリヤは死せずして直に昇天したる者であつた、故に彼は再臨の日に生存せる信者にして其儘化せらるべき者を代表するのである、二人が光れる雲の中にイエスと相會したるが如くに信者も亦眠れると醒めたるを問はず均しく榮光化せられてキリストと相會する其の福ひなる時が必ず來るのである、されば主の再臨を待ち望む者に取てイエスの變貌は最も感謝すべき慰安である。

斯の如く變貌の記事を幾多の假說を以て曲解せんには何等の意味を爲さゞるに反し之を其儘に信ぜん乎、我等の靈を養ふべき極めて貴き敎訓の與へらるゝあり、加之聖書の他の部分と照合して整然と福音の枠の中に包容せらるゝのである、變貌を信じて復活及び再臨は甚だ信じ易くなるのである。

然し乍ら斯の如き信仰は智識より來るに非ず、頭腦は信仰を造る事が出來ない、復活又は再臨等を信じ得るの信仰には或る出發點があるのである、此出發點よりせ

ん乎必ず之を信じ得べく若し然らざらんには假令研究に研究を重ぬると雖も遂に之を信ずる事が出來ないのである、然らば其所謂出發點とは何處である乎。

人は何人も遲かれ早かれ一度は神に遭遇せざるを得ない、神我が面前に現はれて「汝は何ぞや」との問を發し給ふのである、其時答へて「我は特別に惡しき者にあらず」と曰はゞ神は信仰に基づく恩惠を悉く撤回し給ふ、然れども神に我が罪を指摘せられて煩悶懊惱如何にすべき乎を知らず、寢食を廢して悲み涕を流して祈り「神よ、我は罪人の首なり、如何にして此罪を赦さるべき乎、願はくは我を憐み給へ」と曰ひて神の前にひれ伏さん乎、神は乃ちイエスキリストの十字架を示して「見よ、汝の永遠の生命は此處にあり、之を離れて汝の救はるべき途あるなし」と敎へ給ふのである、而して斯く十字架を仰ぎて救拯の實驗を經たる者のみが復活を信じ再臨を信ずる事を得るのである、福音的信仰の出發點は罪の赦の實驗に於て在る、此實驗を握らずして如何なる神學者と雖も聖書を信ずる事が出來ない、余は嘗て紐育の或る有名なるユニテリヤンの敎師を訪ねた事があつた、幾多の談話を交はしたる後最後に余は此問題を提出した、果然其人答へて曰く「我に其實驗あるなし」と、然り、ユニテリヤンと余輩との差別は三位一體又はイエスの神性等の神學問題に在るに非ず、十字架による罪の赦の實驗に在るのである、神學論を以てせば彼等にも亦言ふべき事が尠くない、然しながら暫く論ずるを已めよ、而して心の聖き奥殿に入れよ、其所にて十字架を仰ぎし乎否乎、之を仰ぎし者は信じ然らざる者は信じない迄である。

故に再臨問題は一轉して聖書問題に移り再轉して罪の問題に歸着するのである、再臨を拒み聖書を拒む者は罪の罪たるを否定し十字架の贖罪的威力を否定する、贖罪聖書再臨は相關聯する問題である。

ラザロの復活

約翰傳第十一章の研究

（一九一八年六月九日東京神田バプチスト中央會堂に於て）

有名なる哲學者スピノーザ曰く「若し何人か余の爲に約翰傳十一章に於けるラザロ復活の記事の眞實を立證する者あらば余は余の立てたる哲學を破壞して基督者（クリスチャン）となるべし」と、知るべしラザロ復活の一奇跡は其上に基督教を支ふるの力を有する事を、之れ實にキリストの行ひ給ひし最大の奇跡である、故に若し此事實を信じ得べくば他の奇跡の如きは悉く信じ得るのである、然るに理智を重んずると稱する近代人は之を信ずる能はざるが故に如何にもして之を說明し去らんと欲する、而して過去百二三十年來之に關し多くの註解が試みられたのである。

就中最も巧みなるはパウルスの解釋である、彼は他の奇跡に對しても輕妙なる說明を下したるがラザロの復活に就ては曰く「ラザロは實は死したるに非ず、早まりて墓の中に入れられたのである、然るに喧騷なる周圍より脫（のが）れて靜謐（せいひつ）なる岩間（いはま）に橫はり冷風に面を吹かれて彼は徐ろに蘇生しつゝあつた、而してイエスは四邊の狀況より彼の死せざる事を察知し乃ち墓前にて感謝の祈りを獻げ然る後彼を引き出して外氣に觸れしめたれば忽ち呼吸を回復したるに過ぎず云々」と、斯の如き解釋は勿論人の靈魂の糧として何等の價値をも有しないのである。

更に有名にして一時世の贊成を博したるはルナンの解釋である、彼は曰く「此時弟子のイエスに對する信仰漸く衰へ世の反對は益々加はりつゝあつた、故にイエスはベタニアにありてマルタ弟妹と共に弟子の信仰回復に就て議（はか）つた、然るに彼等の一人は提議して曰く我等の兄弟ラザロ病身（びやうしん）にして殆んど死者に近し、されば彼を墓に入れて死せるが如くに裝（よそ）はしめ而して主往きて之を甦らしめ給はゞ如何と、イエスは素より其手段の甚だ惡しきを知りたるも弟子に對する愛心の餘り彼

等の救濟の爲には已むを得ずとして此策を採用し給うたのである云々」と、卽ち彼れルナンはラザロ復活の大奇跡を以てイエスの善意に出でたる狂言と見たのである、救濟の目的の爲には欺瞞的手段をも辭せずとは決して稀有なる事例ではない、今日宗教界に於て往々にして行はるゝ所である、殊に天主教に於て其弊の甚だしきものがあつた、ルナンは自ら天主教國にありて屢々かゝる事例を目擊したのであらう、而して其事の惡事なるを信ずる能はざりしが故に之をイエスの生涯に應用してラザロ復活の奇跡を說明せんと欲したのであらう。

然しながら之を我等の明白なる良心に訴へ正義と公平とを愛する者の常識に訴へて斯の如き事は有り得べからずである、殊に神の子キリストに此事斷じて有るべからずである、ルナンはイエスの品性をパウルスの說明より救はんと欲して却て彼を普通の天主教僧侶たらしめて了つたのである。

近來に至り更に神學界の巨頭連卽ちカイム、ホルツマン、ワイツゼッケル等の試みたる說明がある、彼等は何も其博學に於て我等の企及を許さゞる一流の學者である、彼等も亦ラザロ復活の事實を信ずる能はずして種々なる假說を設けて曰く「ラザロとは實在の人物に非ず、其名は之を路加傳第十六章の貧者ラザロより引用したのである、其復活は之をヤイロの娘若くはナインの寡婦の子に起りし事實より取つたのである、蓋しイエス傳を編して死者の復活を加へずんば完成しない預言者エリヤ等の生涯にすら死者を甦らしめたる事實がある、況んや『我は生命なり復活なり』と敎へたるイエスの生涯には此敎訓を證明するの事實がなくてはならない、然るにヤイロの娘又はナインの寡婦の子の場合に在りては何れも死後直に行はれし奇跡なるが故に尙不十分たるを免れない、更に大なる奇跡を以て補はなければならない、此必要に迫られて以上の材料を綜合し以て作り上げられたるものが卽ちラザロの復活の物語である」と。

若し所謂學問上の權威を求むるならば宜しく馳せて之等獨逸神學の巨頭に赴くべ

しである、何人か敢て彼等の解釋に對抗する事を得ん、然し乍らラザロの記事を彼等の如くに解釋し去て我等の信仰生活に何程の益を與ふるのである乎、彼等の說くが如くんば約翰傳十一章は學者の研究資料としてはいざ知らず飢えたる靈魂の糧としては全然無價値不必要のものと化して了ふのである、而して獨逸神學の害毒は實に玆に在るのである、聖書をして生ける靈魂と沒交渉の書たらしむるのである、而して此神學が又米國を通うして日本に入り來りつゝあるのである。

然らば余輩に向ひて汝は如何と問はれん乎、余輩は唯聖書有の儘に解釋するのみ、ラザロは死して四日目に甦らされたのである、イエス大なる力を以て「ラザロよ出でよ」と叫び給ひし時死者が墓の中より起き出でたのである、是れ聖書の明白に傳ふる所にして我等は斯く信ずるより他に方法を知らないのである、假令カイム又はルナン又はパウルスの說明は如何にもあれ、神は我等の單純に聖書の記事其儘を信ずる事を許し給ふが故に感謝せざるを得ない。

然しながら確信には必ず深き理由を伴ふ、我等の此の信仰に伴ふ所の理由は獨逸神學者の其れに比して更に有力なるものである、先づ第一に記事其ものが內容の虛構に非ざる事を示すのである、凡て著述の經驗ある者は知る、實見に基づく記述と單なる想像に由る描寫との間には判然たる區別の存する事を、ラザロの記事亦然り、例へば其二十一節に「マルタはイエス來給ふと聞きて出で迎へたれどマリアは尙ほ家に坐し居たり」と言ふが如き、其三十一節に「マリアと共に家に居りて慰め居たるユダヤ人その急ぎ立ちて出で往くを見、彼女は歎かんとて墓に往くと思ひて後に從へり」と言ふが如き、又其三十五節に「イエス涙を流し給ふ」と言ふが如き何れも主題に關係なき記述であつて、若し此記事が何か目的ありての揑造なりとせば之等の些事を挿入すべき必要を見ない、然るに之を揭ぐる所以は其の實見の儘の記述たるにあるのである、約翰傳第十一章の記事其者が事柄の眞實を證明する好箇の材料である。

爾かのみならず斯く解釋する時はラザロ復活の大奇跡はイエスの生涯中最も重要なる資料として其前後の關係に適合し彼れの十字架に釘けらるゝに至りし原因に充當してイエス傳を完成するのである、若し此の奇跡なくんば彼れの受難の動機を十分に説明する能はず、イエスの生涯に一大缺陷を生ずるのである、イエスは何故に十字架に釘けられたのである乎、其理由に外側のものあり、又內側のものがある、凡ての事に內外兩面の理由がある、日々の新聞紙の報ずる所は多く外側の事柄に過ぎない、其裏面に尙ほ內側の原因がある、而して其れが外側の原因を機會として發露するに過ぎない、政黨の爭鬪は內閣轉覆の外側の原因である、然し乍ら其內側に或は小なる家庭問題等の潛むありて、眞實の原因は却て其處に存するのである、イエスの十字架にのせられたるも亦さうであつた、其外側の理由は共觀福音書に傳ふる所の事情であつた、卽ち彼が總督の前に立ちて「汝の言ふが如く我はユダヤ人の王なり、豫言者等の豫言せしメシアなり」と明言したる其事に在つた、此一言に由て彼は國家的罪人と定められたのである、然しながら其他に尙ほ共觀福音書の記載せざる內側の理由があつた、而して約翰傳は共觀福音書に對して補充的性質を有する福音書である、後者の揭ぐる所は之を略し後者の漏らす所は力めて之を補ふのである、共觀福音書はイエスの受難の外側の理由を揭げて其の內側の理由を記さない、是に於てか約翰傳記者は此缺陷を補はんと欲して之を記載したのである、約翰傳記者の見解に由れば祭司の長、民の長老等がイエスを處分せんと欲したる最後の內面的理由は卽ちラザロの復活に於て在つた、彼等は斯かる驚くべき偉力を顯はしたる者を放棄せんには自身の存在の根本を覆へすに至るべきを恐れたのである、而して斯の如くに解して始めてイエス傳に完き解釋を下し得るのである。

然らば最後に問うて曰く如何にして死者を甦し得る乎と、之を説明すべきものは唯一つあるのみ、卽ち我等自身の心中に行はれたる大奇跡是れである、此實驗を

有する者はラザロの復活を信ぜざるを得ない、彼の大奇跡を行ひし者は必ずや亦此の大奇跡を行ひ得べきである、然らずしてラザロの復活を證明する事は不可能である、聖書的信仰はかゝる者の抱き得べき特權である、其點に於て基督者のいと小さき者も大哲學者スピノーザよりは大なりである。

反對者或は約翰傳にキリストの再臨なしと言ひて之に據る、然らばラザロの復活は如何、再臨なきの故を以て約翰傳を取る者は其中に明記せらるゝラザロの復活を如何に解せんと欲する乎。

ラザロの復活は實に再臨の日に於ける我等の復活の模型である、主イエス大聲に呼はりて「ラザロよ、出でよ」と曰ひ給へば死者ラザロ欣然として墓より出でしが如く時來りて彼れ亦聲高く我等各自の名を呼び給はゞ我等も亦悉く墓より起き出づるのである、信者の最後の希望は此處にある、ラザロの復活を信じて亦自己の復活を信じ得るは誠に感謝すべきである。

ツルーベッコイ公の十字架觀

（一九一八年六月十六日東京神田バプチスト中央會堂に於て）

ツルーベッコイ公とは其名の示すが如く露國人である、而して露國人中には往々にして深遠なる思想を抱く者がある、加之露國人の思想は東洋人殊に日本人の心に訴ふる處が多いのである、トルストイの如きは其最も好き實例である、彼は日本に於て尠からざる弟子を有するのみならず彼の研究を目的とする雜誌すら此國に於て發刊せられて居るのである、其他ツルゲネーフ、ドストエフスキー等みな日本人に迎へられつゝある、是れ果して何故である乎、佛國人曰く「露西亞人の皮一重を剝がば其下に亞細亞人を見るべし」と、然り露西亞人は歐羅巴人にして實は亞細亞人である、彼等には歐羅巴人の知識と理性とがある、然し乍ら同時に亦彼等には亞細亞人の情性がある、露西亞人の思想が日本人に了解せられ易きは卽

ち此故である、キリストの再臨につき最も深き印象を余に與へたる者も同じく露西亞人たるウラジミール・ソロギエフであつた。

ツルーベッコイも亦其の大體の精神に於てトルストイ若くはソロギエフと類似したる處がある、彼も亦西洋の學者にして同時に東洋の詩人である、故に西洋人の見ざる眞理を我等に敎ふるのである、而して露國の學者に就き敬服すべきは同一人にして哲學者たり政治家たり詩人たり且信仰家たる者多き事是れである、斯の如きは西洋人中に多く見ざる處である、トルストイとソロギエフとは露國の產出したる二大哲學者であつた、然し乍ら彼等は又極めて能く社會の事情に精通し或る意味に於ては大なる政治家若くは社會改良家であつた、而して更に又深き信仰家であつた、彼等にして若し西歐に生れしならば必らずや偉大なる傳道者として其名を馳せたであらう、然し乍ら露西亞人たる彼等は單に一個の深き信仰を有する文士として終つたのである、ツルーベッコイも亦斯種の人である、彼れの政治家たる事は近頃の過激派に對する彼の運動に由て知る事が出來る、然も彼の論文に由て見る時は彼は同時に哲學者であつて又深き信仰家である、玆に紹介せんと欲する彼の十字架觀の如きは明白に其事を證明するのである。

十字架は基督者の信仰生活を代表する者である、主イエスは敎へて曰ひ給うた、「若し我に從はんと思ふ者は己を棄て其十字架を負うて我に從へ」と、使徒パウロは叫んで曰うた「我イエスキリストと彼れの十字架に釘けられし事の外は何事をも知るまじ」と、而して十字架とは肉を足下に踏へ之を棄て之を去て唯靈の世界にのみ生くる事と解せらる、卽ち肉又は此世は靈の敵である、故に靈を以て肉を征服して純粹なる靈的人物とならざるべからずと、是れ卽ち普通基督者の十字架觀である。

然るにツルーベッコイの十字架觀は之と趣を異にする、彼は勿論十字架の歷史的意義を否む者ではない、十字架は十字架である、卽ち羅馬政府の實行したる最も

殘忍なる刑罰にしてナザレのイエスの殺戮せられたる其處刑方法であつた、故に十字架と基督敎との間には歷史的に最も密接なる關係がある、古來十字架は基督敎の精神を代表する表號として認められたのである、而してツルーベッコイは十字架に關する此歷史的事實を說明し去らんと欲する者ではない、然しながら彼は其以外に尙或る一の意義を十字架に於て認むる者である、十字架は唯に其歷史的事實を示すのみならず又人生及び萬物に關する深き眞理を表はすものなる事を彼は指摘するのである。

十字架は縱橫二本の棒の交叉に由て成る、而して其橫木の表すものは何ぞ、曰く「地」である、其縱木の表すものは何ぞ、曰く「天」である、天なる縱木が地なる橫木を貫きて之を上に携へ昇らんとする所に十字架の意義があるのであると、是れツ公の十字架觀の根本概念である。

其の所謂「地」に屬する者の中に我等の肉體がある社會がある文明がある、其の所謂「天」に屬する者の中に信仰がある渴仰がある、而して人の宗敎は二者の何れかに屬するものである、基督敎以前の宗敎は槪ね自然敎にして「地」に關する者であつた、卽ち此世を改善し社會を開發せんとする現世主義地的本位の宗敎であつた、希臘哲學は其代表者である、我國に於て重んぜらるゝ儒敎の如きも亦之に屬する、治國平天下は其目的であつたのである、儒敎は空想を說かずといふ、是れ其の現世主義なるが故に外ならない、然し乍ら之に對して又全然「天」的なる思想があつた、印度宗敎は其の代表者である、卽ち肉又は此世を以て靈の敵と見て之と戰ひ之に打ち勝ち之を征服し之を除却して唯だ一直線に天に向つて進まんとする の思想である、「地」的に非ずんば「天」的、純肉的に非ずんば純靈的、肉の外何事をも念はざる世の所謂英雄豪傑と靈の外何事をも念はざる所謂遁世脫俗の聖人君子、彼か此か、古來人類の思想は此二者の中の一を出でなかつたのである。

然るにツルーベッコイ曰く二者共に誤まれり、人生橫を以て盡きず又縱のみを以

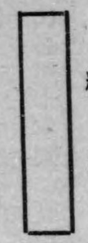
て足らず、政治經濟殖産興業は人生の目的ではない、然れども此世を棄てゝ純粋なる靈的生活のみを營む事が人生ではない、神の此地を造り給ひしは之を棄てんが爲めに非ずして之を天國と化せんが爲めである、故に肉は之を征服すべきに非ず靈を以て之を靈化すべきである、肉を代表する横木を貫くに靈を代表する縱木を以てしたる十字架は卽ち此眞理を示すものである、横木のみを以て十字架を成さず、縱木のみを以ても同じく十字架を成さない、靈なる縱木ありて肉なる横木を地より天に擧げんとする所に初めて十字架の意義がある、而して此交叉點に於てイエスキリストは磔殺せられ給うたのであると、ツルーベッコイ公の十字架觀は此くの如き者である、而して此説明は極めて深き眞理を語るものと謂はざるを得ない。

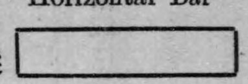
キリストは何故に十字架に釘けられ給うた乎、彼は神の心を心として同時にまた地と肉とを棄て給はざりしが故である、此の物質的世界を彼の雙手に抱きて之を天國に携へんとし給ひしが故である、家庭も社會も政治も産業も悉く之を神に献げ給ひしが故である、彼にして若し希臘思想に於て見るが如く現世又は肉體の幸福のみを念とし給はん乎、社會は必ずや喝采を以て彼を歡迎したであらう、又彼にして若し印度哲學に於て見るが如く獨り自己の靈的生活のみを維持し現世及び肉體と全然離絶し給はん乎、社會は彼を聖者と呼び哲人と稱して尊敬したであらう、而して十字架は決して彼を見舞はなかつたであらう、然しながらイエスキリストに在ては人生の凡てが神に由て靈化せられ聖化せらるべきであつた、而して是れ實に此世の容す能はざる所であつた、茲に於てか印度宗教又は希臘哲學の嘗て遭遇せざりし十字架は獨り彼れイエスキリストの運命となつたのである、基督教の基督教たる所以、其の凡ての他の宗教と異なる所以は全く此處にあるのである。

再臨の信仰も畢竟するに此思想に外ならない、反對者或は曰くキリスト其の肉體

を以て再び天より降るといふが如きは迷信であると、余輩も亦爾か言ふであらう、誰が此講壇の上より斯の如き再臨説を唱へた乎、余輩の唱道する再臨は純物質的の思想ではない、靈化せられたる體を以て復活昇天し給ひしキリストが再び其靈體を以て來り給ふと云ふのである、而してキリストの復活は信者の復活の初穂である、再臨ありて凡ての信者は亦彼の如くに其肉體を靈化せしめらるゝのである、而して信者の復活は萬物の復興の初穂である、再臨ありて萬物も亦靈化せしめらるゝのである、故に再臨は又純靈的思想ではない、肉を離れて靈のみ昇天するのではない、イエスの變貌を以て示されしが如く肉體の靈化である、此世の聖化である、宇宙萬物がキリストの榮光を被りて天國と化するのである、十字架、復活、昇天、再臨等基督教の根本的眞理は皆此思想の上に立つのである。

肉のみに非ず又靈のみに非ず、靈を以て肉を聖化する事、是れ基督教の福音である、而して是れ十字架なくして實現し得る事ではない、靈の來りて肉を抱かんとするや必ず十字架を伴ふ、故に十字架は凡ての基督者の負はざるべからざる所である、基督者は自己一人の救拯を以て滿足する事が出來ない、彼にして若し周圍を顧みる事なく獨り天國に入らんと欲せば卽ち唯平和あるのみである、然れども福音は之を許さない、福音の性質は縱木を以て横木を貫き之を携へて天に昇るに在る、基督者は此世の不信者の間に入り自ら血を流して彼等を天に携へ往かなければならない、家庭と社會と國家との一切を携へ往かなければならない、而して此所に必然十字架は實現するのである、十字架は靈と肉との交叉である、靈を以て肉を聖化すべき唯一の途である、主イエスキリスト此途を取りて全世界を救ひ給うた、我等も亦彼に倣うて此途を取らなければならない、ツルーベッコイ公の十字架觀は實に福音の根本義を明かならしむるものである、實に深い貴い思想である。





横に廣き地を表號する、殖産、工業、社會、政治、及び地と人とに係はる思想は凡て地に屬る者であつて横木を以て表號せらる、支那の儒教、希臘の哲學は是れである。

縦に高き天を表號する、靈、神、天、來世、永生、及び神と天と靈とに係はる凡の思想は天に屬る者であつて縦木を以て表號せらる、世を離れて天に歸り、肉に死して靈に生くると稱する修養の道は凡て是れである。

縦に高き天が横に廣き地を貫きて之を上に擧げんとする者、是れが十字架である、基督の福音は十字架である、彼は縦木横木の交叉點たる十印に於て釘けられたのである。

馬太傳第十三章の研究

（一九一八年六月廿三日東京神田バプチスト中央會堂に於て）

聖書の研究は困難なる事業である、其の研究の結果窮なき生命の泉を掬むを得るも、茲に達する迄には大なる努力を要する、そは恰も金銀の採掘の如きである、金を以て身を裝ひ銀を以て物を飾るは美はしと雖も之を採掘するは容易ならざる事業である、聖書も亦然り、其研究には人の知らざる苦心がある、聖書の一言一句を其前後の關係に照合して穿鑿し注意に注意を重ねて其意義を探究しなければならない、然しながら困難なりと雖も是れ最も貴き事業である、聖書研究の困難を解せず又其意義を解せざる者は動もすれば之を以て傳道事業と別視する者がある、彼等は曰ふ聖書學者は傳道を爲さずと、又曰ふ最早や聖書を棄て起ちて國民を救へよと、然しながら聖書研究に勝るの傳道はないのである、聖書を措いて他

に國民を救ふ途は何處にある乎、力むべきは聖書研究である、勸むべきは神の言の探究である。

今此處に馬太傳第十三章の講解を試みんとするは卽ち聖書研究の如何なる乎に就て其例を示さんと欲するに過ぎない、說敎者は多く聖書中の一句を題文として縱横に論を行る、之れ必ずしも惡しき事ではない、然しながら又或時は馬太傳若くは羅馬書等の全體に就て其の何を敎ふる乎を說かなければならない、一書又は一章を題文としての說敎も亦甚だ必要である、馬太傳第十三章は何を敎ふる乎、之れ今日の題目である、而して此一章が一の大なる敎訓を與ふるものなる事を明かにせんと欲するのである。

馬太傳第十三章は七個の譬喩より成る、而して七は聖書に在て完全を示すの數である、七敎會、七封印、七福、七日、七年又は四十九年等の如し、而して七個の譬喩の內容は左の如くである、

第一種蒔の譬喩
第二稗子の譬喩
第三芥種の譬喩
第四パン種の譬喩
第五隱れたる寶の譬喩
第六眞珠の譬喩
第七網打の譬喩

所謂高等批評家は曰ふ「馬太傳は順序を逐うて編纂せられし書ではない、イエスの事蹟又は敎訓を其種類に由て撰擇分類したる者である、故に山上之垂訓又は奇跡又は預言等を各々其題目の下に一括して記述したるに過ぎない、敎訓相互の間又は譬喩相互の間には何等の關係なく唯雜然として籠中に投入したるが如くである」と、果して爾うである乎、若し然らんには少くとも馬太傳は全く文學

上の價値を有せざる書である、斯の如き粗笨なる編纂を爲したるマタイは到度文學者としての資格を要求する事が出來ない、然しながら馬太傳の價値は人の能く知る處である、世界に有名なる文學者が此書を評して「人類に最大の感化を與へたる書」と呼び做して居るのである、斯かる貴重なる書の記事が雜然たる羅列に過ぎずして其相互の間に何の關係なく一貫して或る大なる眞理を傳ふる處なしとは何うしても受取る事が出來ない、換言すればイエスは茲に七個の譬喩を以て斷片的に別個の眞理を語り給ひしものに非ずして本章全體が七個の譬喩を以てする一の大說敎なる事を疑ふことが出來ない、七は完全の數である、故に七個の譬喩は全體として一の眞理を敎ふるものであつて其相互の間に深き關係ありと見るは極めて適當なる解釋である、而して是れ本章を解するが爲の第一の鍵である。

次に注意すべきは七なる數の中に四と三との順序である、聖書に在ては四は地の數にして三は天又は靈の數である、而して見よ七個の譬喩中第一の種蒔は地に屬ける事である、第二の稗子の成長亦然り、故に其第三第四も亦同樣ならんと想像することが出來る、終の三に至ては明白に天又は靈の事である、隱れたる寶の發見といひ眞珠の發見といひ何れも地以上の事である、殊に最後の網打は卽ち審判であつて神の自ら爲し給ふ所である、四と三、地と天、是れ本章を解する上に於ての第二の鍵である。

斯くの如くに解し來れば本章の意義は略々明白である、卽ち種蒔を以て始まり網打を以て終る七個の譬喩は神の言の初めて地に蒔かれしより世の終に至る迄の福音史を預言したる大預言である、こは一個の假說なりと雖も確實なる根據に基づく假說にして、而して七個の譬喩の內容は歷史上の事實と相俟ちて此說の謬らざる事を證明するのである。

第一種蒔の譬喩の敎ふる所はキリスト御自身の說き給ひし福音の其效を奏すること甚だ少き事實である、其或者は路傍に落ちて空中の鳥に啄まれ、或者はバレス